佐久市埋蔵文化財調査報告書　第187集

春日居館跡

長野県佐久市春日　春日居館跡発掘調査

2011. 3

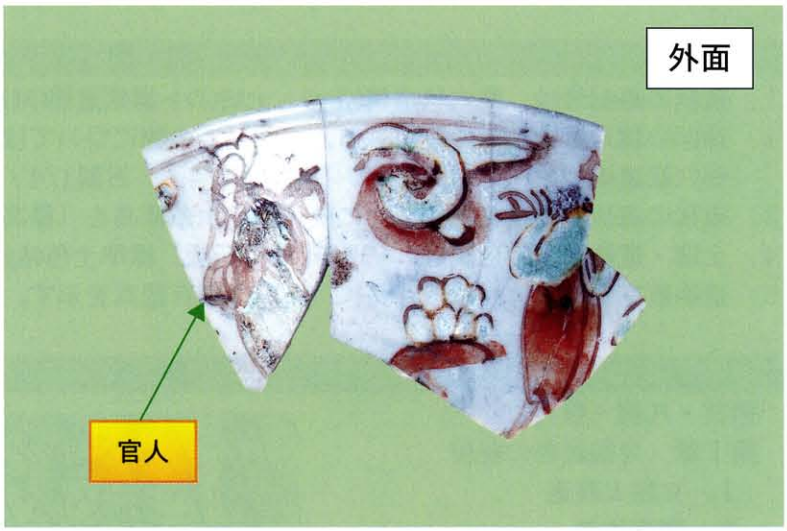
佐久浅間農業協同組合
佐久市教育委員会

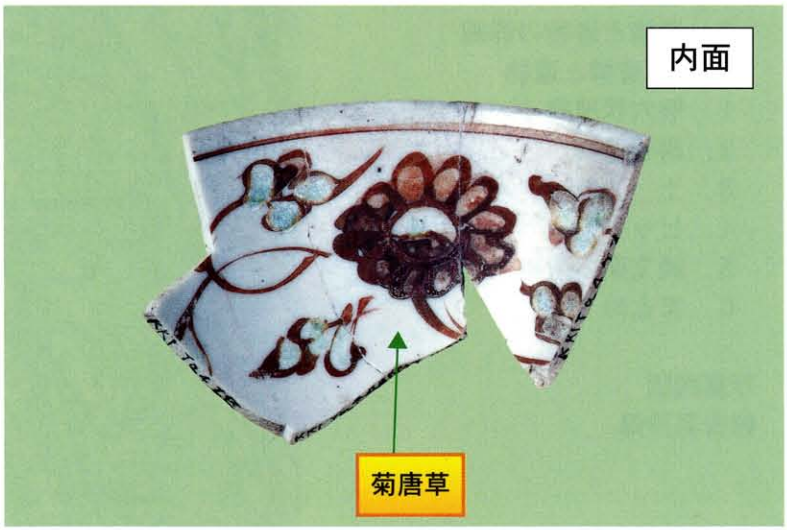
春日居館跡の発掘調査について

今回の発掘調査は調査面積が300㎡という小規模なものでした。しかし、大変重要な発見が２つありました。

まず第１として『堀跡』の発見があります。この春日居館跡については明治初年の文献に「塁濠二重ありて堀端小路の称あり。」という記載が残っているのみで、具体的な事は全く解っていませんでした。今回の発掘調査では東西方向に延びる大小２本の溝を確認しました。このうち北側の溝は規模が大きく、深さは２m、幅は５m以上と推定できます。館の「堀」にふさわしい規模のものでした。この事から文献に書かれた二重の堀が今回発見された可能性が非常に高く、館の具体的な姿が一歩確認できたことになります。

次に『五彩碗』の出土です。本品は戦国期（16世紀代）の竪穴状遺構から土鍋片や青磁片などと共に出土しました。碗の模様は外面にかぶり物をした官人、内面には菊唐草の文様がそれぞれ赤・緑・黄色等で描かれています。本品はこの特徴から１６世紀中頃に中国の景徳鎮系の窯で焼かれた「赤絵」または「五彩」と呼ばれる焼物です。「五彩」は白磁などの表面に赤・黄・緑など各種の釉を使って絵付けするもので、中国では１２世紀末に考案され、明や清の時代には優れた製品が数多く作り出されています。





五彩は長野県内からの出土例が極めて少なく、なぜこの春日の地から出土したのか、どのような流通経路で持ち込まれたのかが今後の課題となります。

本館跡は戦国末期、佐久の平定に尽力した依田信蕃をはじめとする依田氏の居館として伝承のある場所です。本資料はその活躍を裏付ける一品となるのかもしれません。

例　言

1．本書は、佐久浅間農業協同組合が計画する春日支所建設工事に伴う春日居館跡の発掘調査報告書である。
2．調　査　原　因　者　　佐久浅間農業協同組合
3．調　査　主　体　者　　佐久市教育委員会
4．遺跡名及び所在地　　春日居館跡　（ＫＫＩ）　佐久市春日2994－1
5．調査期間及び面積　　調査期間　　平成22年4月13日～平成23年3月18日
　　調査面積　　300㎡
6．本書の編集・執筆は冨沢が行った。
7．本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本書作成にあたり、大学共同利用機関法人人間文化研究機構　小野正敏氏と長野県埋蔵文化財センター　市川隆之氏にご指導を頂きました。また、佐久浅間農業協同組合の関係各位には、御協力を頂きました。記して感謝いたします。

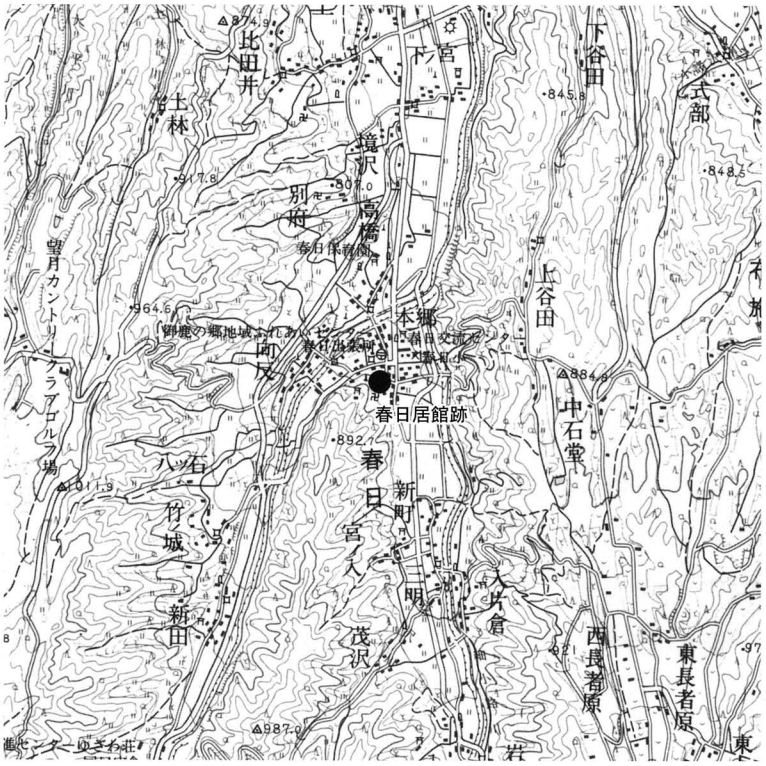
凡　例

1．遺構の略記号は、竪穴状遺構(Ｔa)・土坑(Ｄ)・溝状遺構(Ｍ)である。
2．挿図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については挿図中にスケールを示す。
　竪穴状遺構1/80　　土坑1/80　　土器1/4　　石器1/4・1/3　　古銭1/2
3．遺構の海抜標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。
4．土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版　標準土色帖』に基づいた。
5．遺物観察表の（　）は残存長、〈　〉は残存器高を示す。

目　次

例言・凡例・目次
第Ⅰ章　発掘調査の経緯
　1．立地と経過
　2．調査体制
　3．遺構と遺物の詳細
第Ⅱ章　遺構と遺物
　1．竪穴状遺構
　2．溝状遺構
　3．土　　坑
　4．ピット
　5．縄文期の遺物
　6．まとめ

写真図版
報告書抄録



第１図　遺跡位置図（1:50000）

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

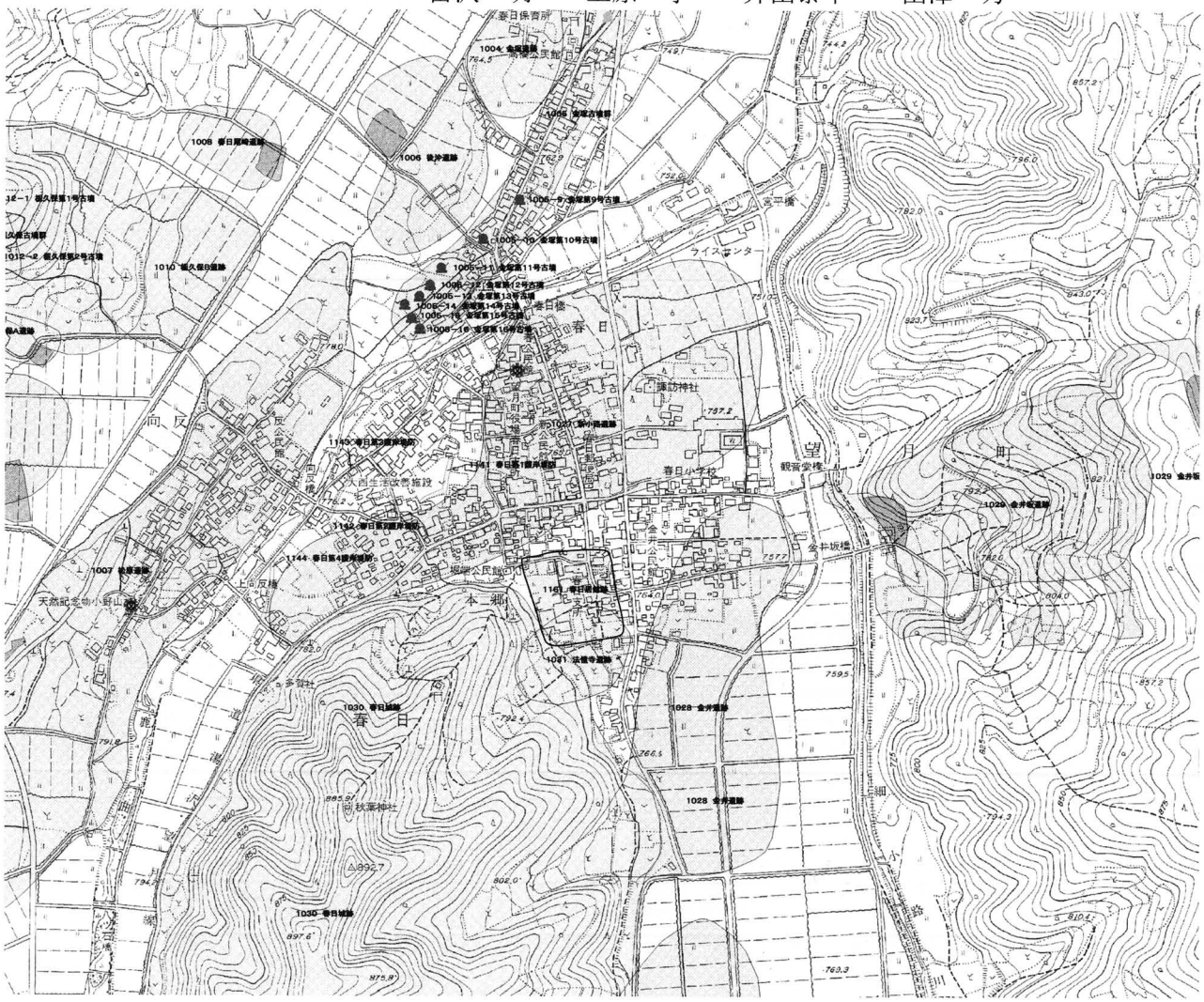
1．立地と経過

春日居館跡は佐久市の春日地籍に所在する。遺跡は鹿曲川と細小路川の合流地点より上流700mに位置する。館跡内には現在「康国寺」があり、地割りから一辺150m程の区画堀が「コ」字状に巡ることが推測できる。寺に接して北側には「堀端通り」の地名が現在でも残る。館跡近辺の標高は770m内外を測り、館の南西側にあたる120m程高い山尾根上には春日城跡が所在する。

今回、遺跡内において佐久浅間農業協同組合により春日支所建設の計画がなされたため、佐久市教育委員会では文化財保護法第93条の届け出を受け、試掘調査を行った。結果、開発対象地に遺構が発見され保護協議を行い遺跡破壊の恐れがある部分については記録保存を目的とする発掘調査を行う事となった。

2．調査体制

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	土屋盛夫			
事　務　局	社会教育部長	工藤秀康				
	文化財課長	森角吉晴				
	文化財調査係長	三石宗一				
	文化財調査係	林　幸彦	並木節子	須藤隆司	小林眞寿	羽毛田卓也
		冨沢一明	上原　学	井出泰章	出澤　力	



第２図　周辺遺跡位置図　（1:10000）

調査体制

調査担当者	冨沢一明				
調　査　員	柏木義雄	臼田　猛	澤井知春	清水澄夫	羽毛田利明
	坂井一夫	小島　真	池田勝吉郎	檜山修一	平林麻郎
	川瀬祥太	上村貴恵	井出孝子	林　まゆみ	小林妙子
	橋詰勝子	橋詰信子	柳澤孝子	清水律子	堺　益子
	狩野小百合	広瀬梨恵子	田中ひさ子		

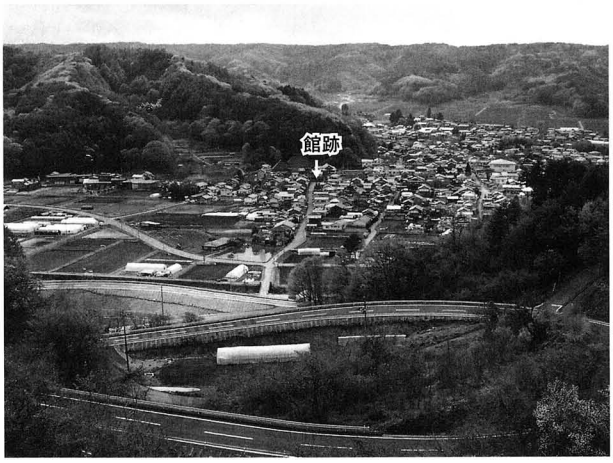
3．遺構と遺物の詳細

遺　構	竪穴状遺構	３棟
	土　坑	１８基
	溝状遺構	２本
	ピット群	２６個
遺　物	縄文土器（前期～後期）	
	中世陶磁器類　古銭	
	鉄製品　　石製品	

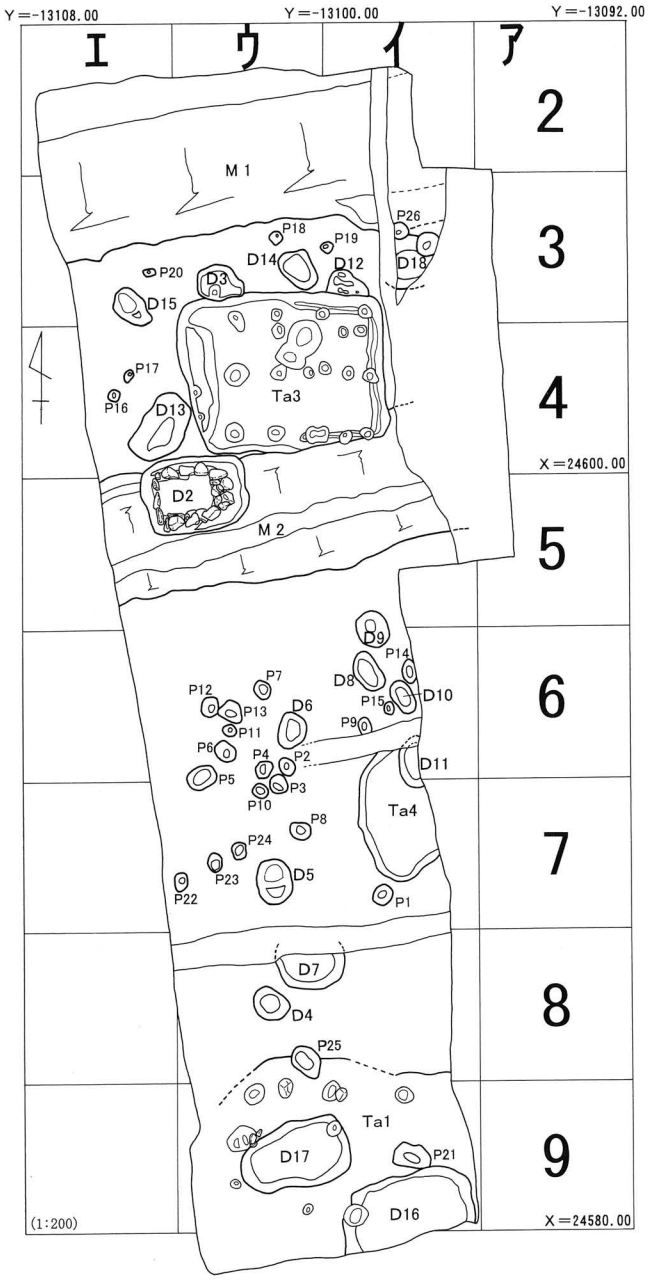
土　層

今回の調査地点は蓼科山麓の尾根が沖積地へと変わる場所にあたる。地形的には東に向けて傾斜する地形であり、周辺部よりもやや高かったが、調査地点の地層には一抱え以上の大型の川原石が遺構覆土を中心に転がった状態であった。

遺構確認面と考えられる層についても、表土下は大型の川原石や細かな砂利混じりの二次堆積ローム層がある部分と川原石と砂の混合層が調査区に広がっていた。これら川原石は、遺跡西側に流れる鹿曲川の氾濫により運ばれてきたものと考えられる。



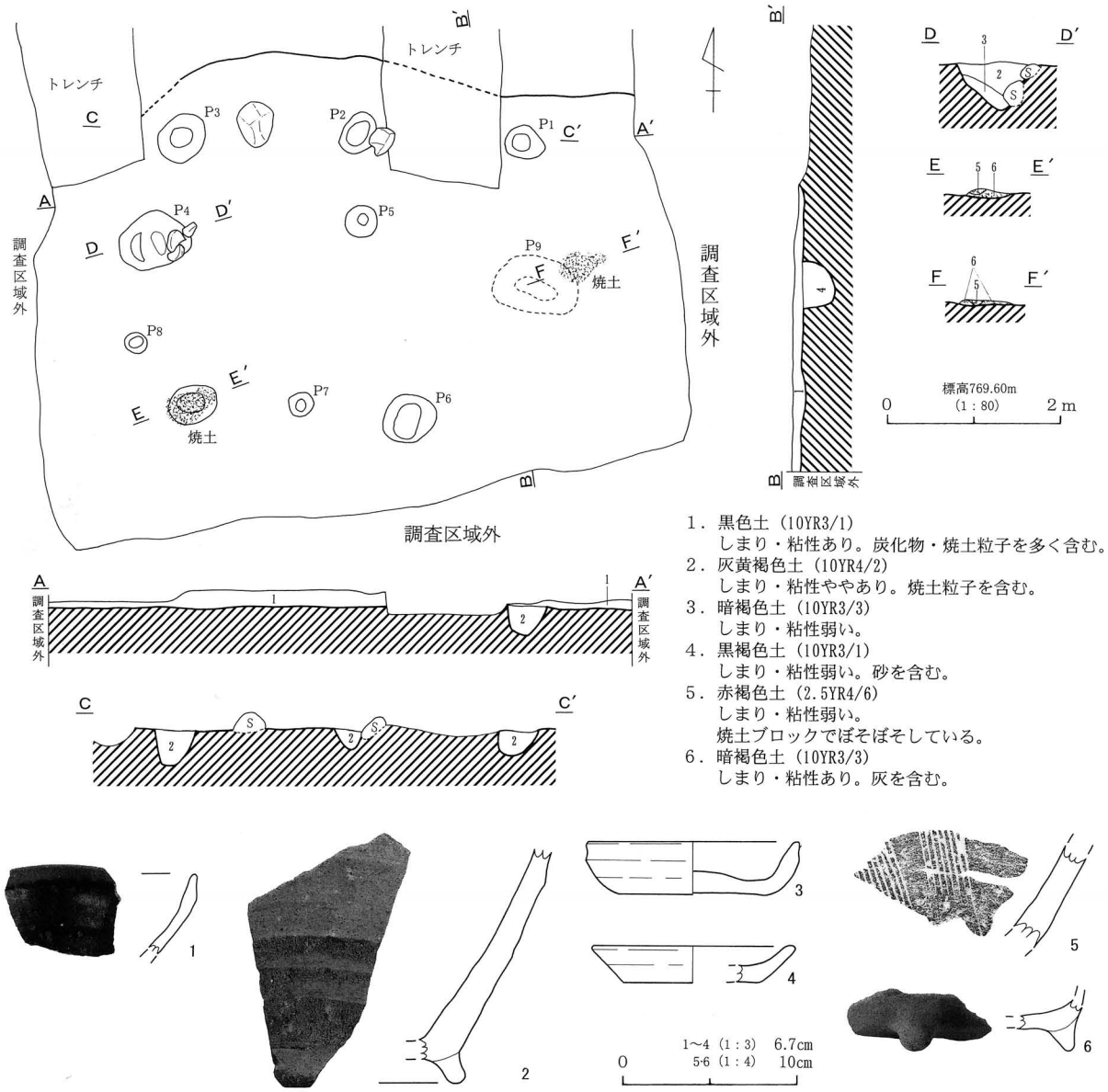
東よりの遺跡遠景



第３図　調査全体図（1：200）

第Ⅱ章　遺構と遺物

1．竪穴状遺構



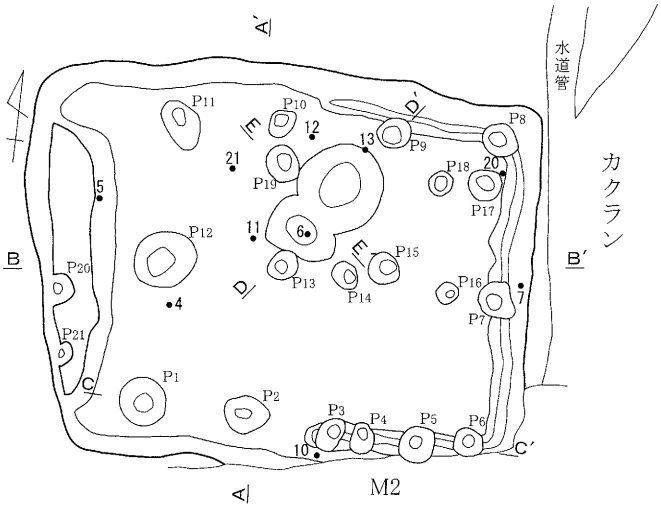
第４図　Ｔａ１号竪穴状遺構及び出土遺物実側図

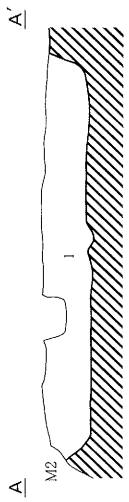
（1）Ｔａ１号竪穴状遺構

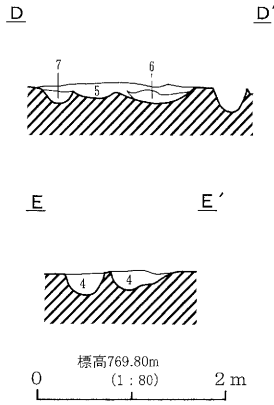
本址は調査区南端に位置する。東西と南側は調査区外となる為全容は不明である。薄い覆土下に床と考えられる僅かな硬質面があり、この範囲を竪穴状遺構とした。また床面には焼土の広がり２カ所とピットを９カ所確認した。ピットの規模は径26～98cm、深さは16～72cmを測る。Ｐ１～３は直線的に並び建物の柱穴と考えられる。出土遺物は覆土中のものがほとんどであった。

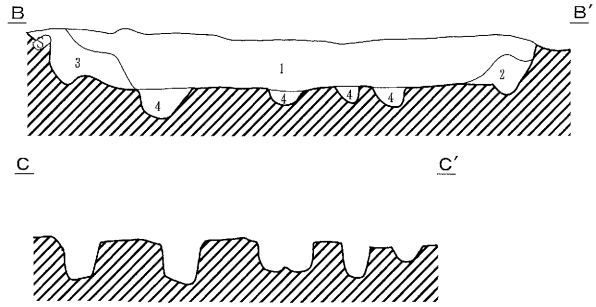
（2）Ｔａ３号竪穴状遺構

本址は調査区北側に位置する。Ｍ２号溝状遺構より古い。形態は方形で、規模は北壁5.28m、南壁4.62m、西壁3.83m、東壁3.52mで、壁高は13～59cmを測る。東側に壁溝が巡り、西側にはテラス

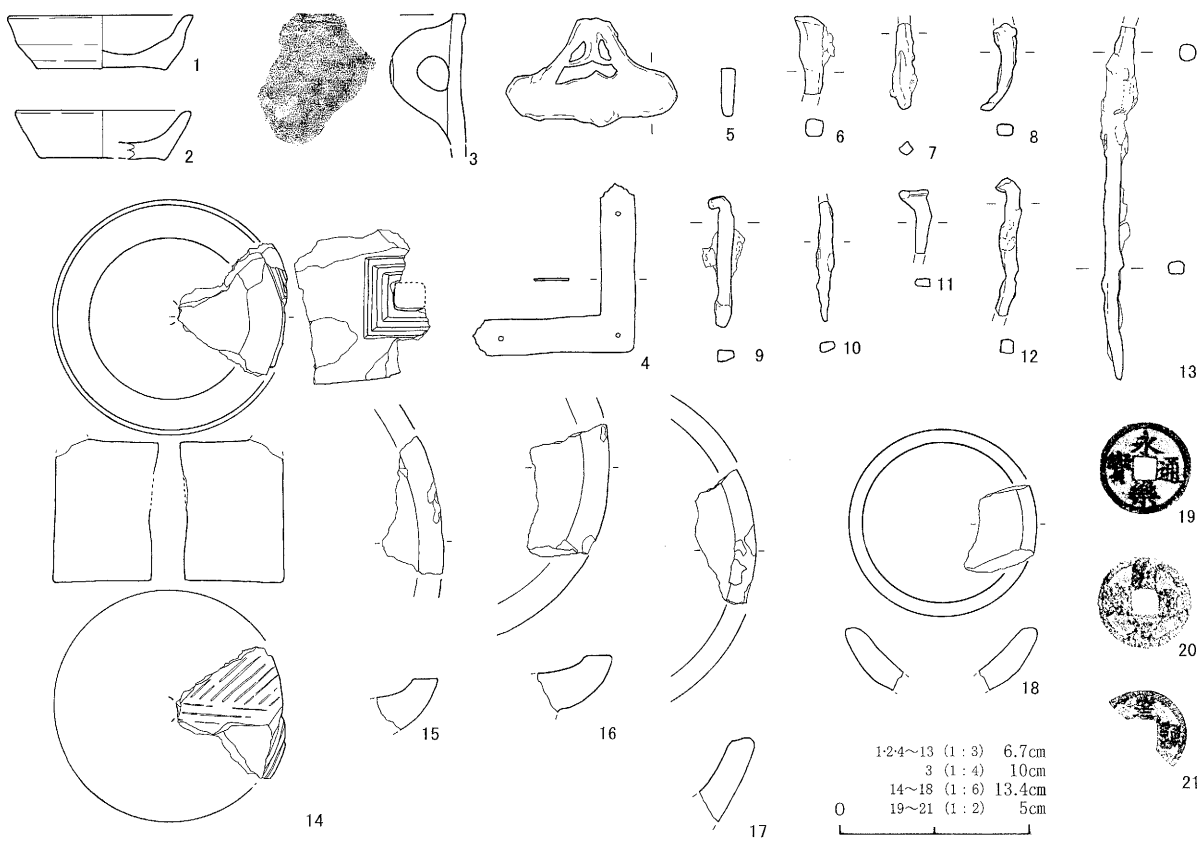




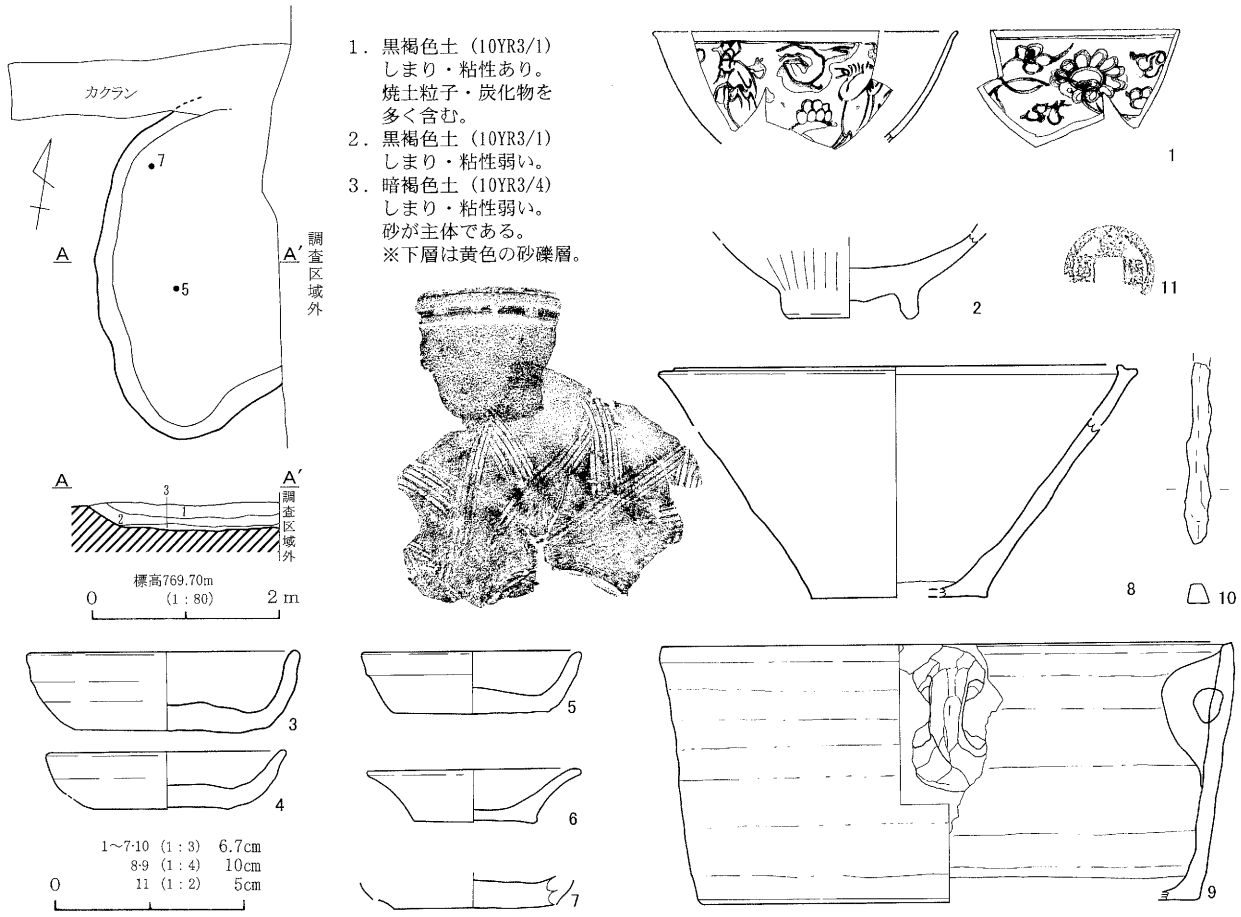




1．黒褐色土（10YR3/1）　しまり・粘性弱い。小石を多く含む。
2．褐色土（10YR4/4）　しまり・粘性弱い。さらさらした土。
3．暗褐色土（10YR3/3）　しまり・粘性あり。黄色ローム粒子と黒色土ブロックを多く含む。
4．褐色土（10YR4/4）　しまり・粘性弱い。ぼろぼろしている。
5．灰白色土（10YR7/1）　しまり・粘性弱い。灰と焼土ブロックを多量に含む。
6．暗褐色土（10YR3/4）　しまり・粘性弱い。
7．黄褐色土（10YR5/8）　しまり・粘性ややあり。小石を多く含む。



第５図　Ｔａ３号竪穴状遺構及び出土遺物実測図



第６図　Ｔａ４号竪穴状遺構及び出土遺物実測図

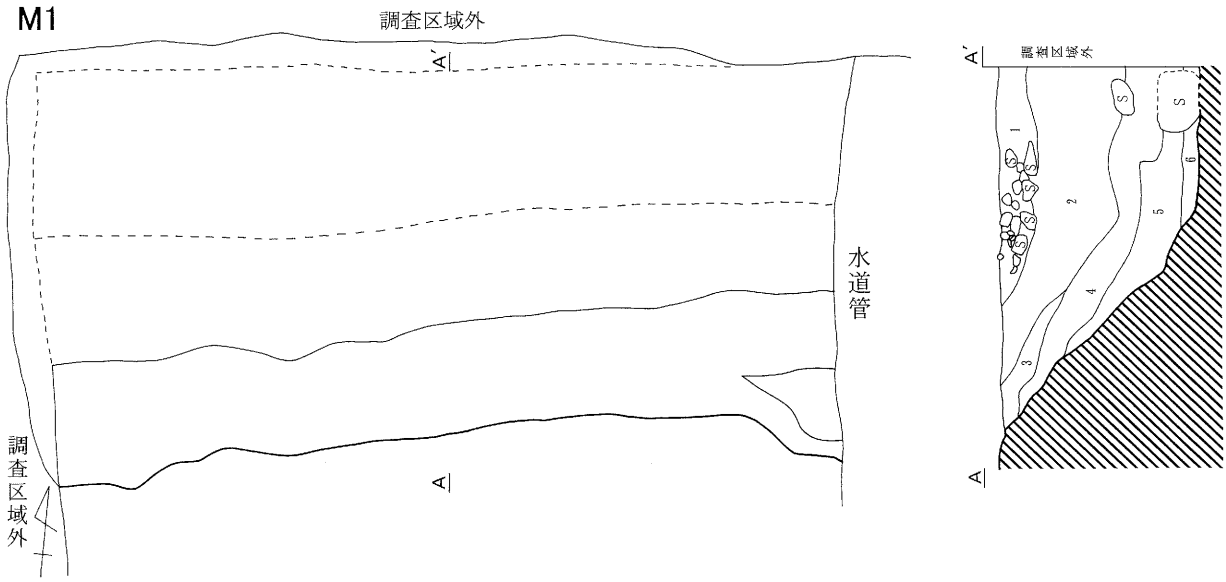
が設けられていた。ピットは21個検出され、東西方向に３列の柱穴と考えられる。規模は径22～68㎝、深さ７～45㎝を測る。また北壁中央よりの床面には灰の詰まった土坑が確認された。規模は長軸138㎝、短軸80～90㎝、深さ16～22㎝を測る。形態は二つの土坑が連結したような状態であり、新旧は確認されなかった。床は踏み固めたような土であった。

遺物は覆土中や床面から出土した21点を図示した。特に金属製品の出土が多く、４は金箔を施した銅製品で三カ所に止め穴と思われる穿孔があった。形態より木製品の留め金と考えられる。５は火打金でほぼ完形である。山形タイプのもので、頂上部には３カ所の窓が開けられている。６～13は釘類と考えられる。１と２はカワラケであり、胎土はよく精錬されている。

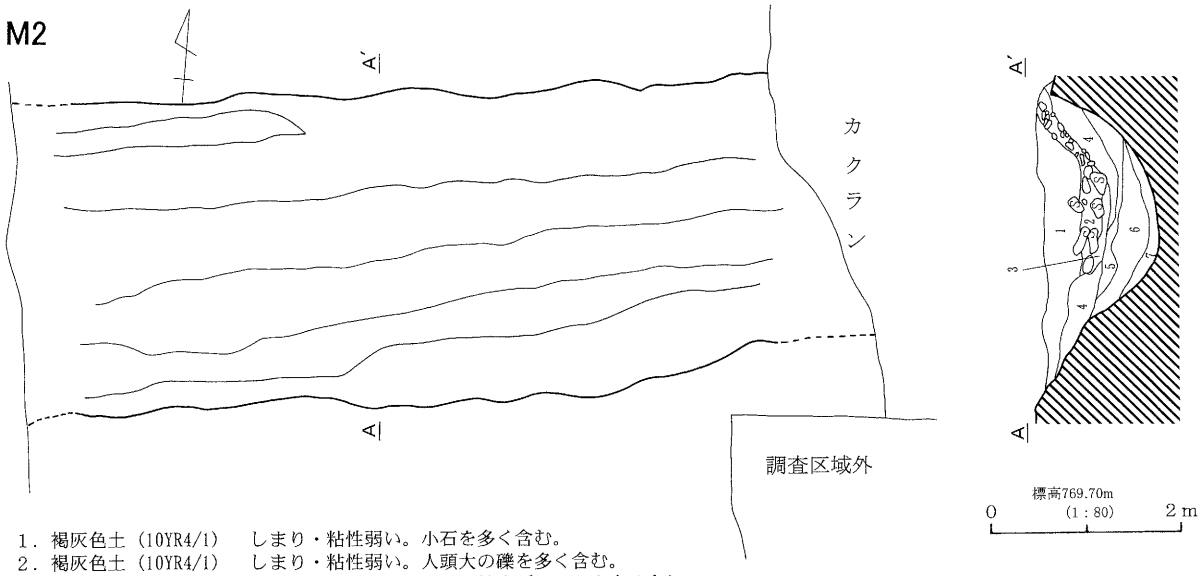
（３）Ｔａ４号竪穴状遺構

本址は調査区中央部に位置し、東側が調査区外となる。Ｄ11号土坑と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は不整形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸3.50m、短軸1.93mで、壁高さは９～19㎝を測る。ピット等は確認されなかった。出土遺物は床面上からの出土が多かった。特に注目される遺物としては巻頭でもふれた景徳鎮系の五彩碗がある。４点の破片が接合したがいずれも覆土中からの出土で、彩色の状態から二次焼成を受けていると考えられる。６は土鍋と同じ胎土の灯明皿である。８はすり鉢で、胎土は土鍋と同じく荒い砂粒子を多く含む。底部は回転糸切離しである。

2．溝状遺構



1．黄褐色土（10YR5/6）　しまり・粘性弱い。石を多く含む。
2．褐灰色土（10YR5/1）　しまり弱い。粘性あり。小石を含む。（近世の遺物あり。）
3．暗褐色土（10YR3/3）　しまり・粘性弱い。石を含む。
4．褐色土（10YR4/4）　しまり・粘性弱い。炭化物を含む。
5．褐色土（10YR4/6）　しまり・粘性ややあり。ローム粒子を多く含む。
6．褐灰色土（10YR5/1）　しまり・粘性あり。泥炭化した土。

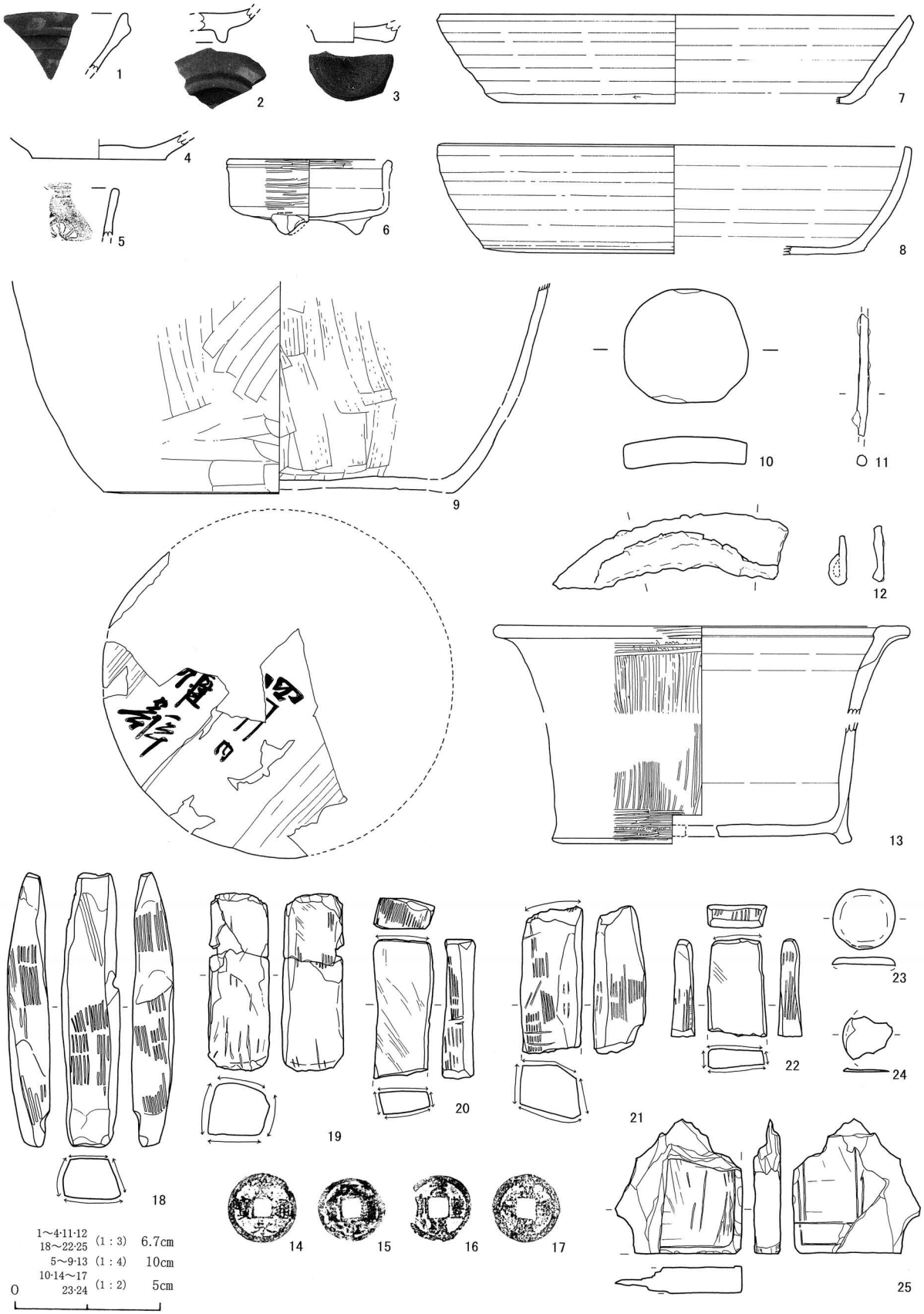


1．褐灰色土（10YR4/1）　しまり・粘性弱い。小石を多く含む。
2．褐灰色土（10YR4/1）　しまり・粘性弱い。人頭大の礫を多く含む。
3．黄褐色土（10YR5/8）　しまり・粘性あり。ローム粘土ブロックを多く含む。
4．暗褐色土（10YR3/3）　しまり・粘性ややあり。小石を多く含む。
5．褐色土（10YR4/6）　しまりあり。粘性弱い。黄色の砂の層。
6．黒褐色土（10YR3/1）　しまり・粘性あり。べたべたした土。
7．暗褐色土（10YR3/4）　しまり・粘性弱い。

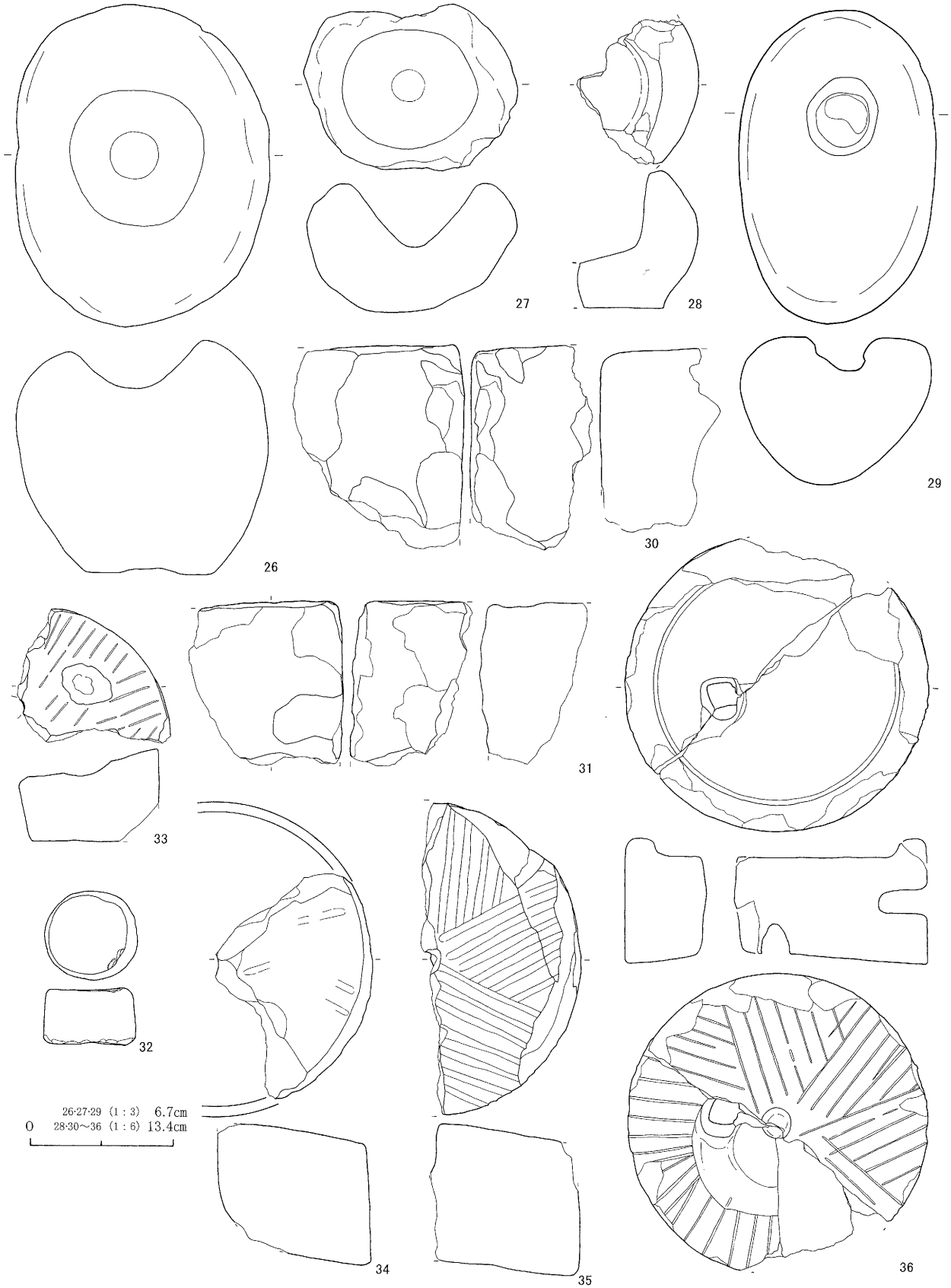
第７図　Ｍ１号．Ｍ２号溝状遺構実測図

（１）Ｍ１号溝状遺構

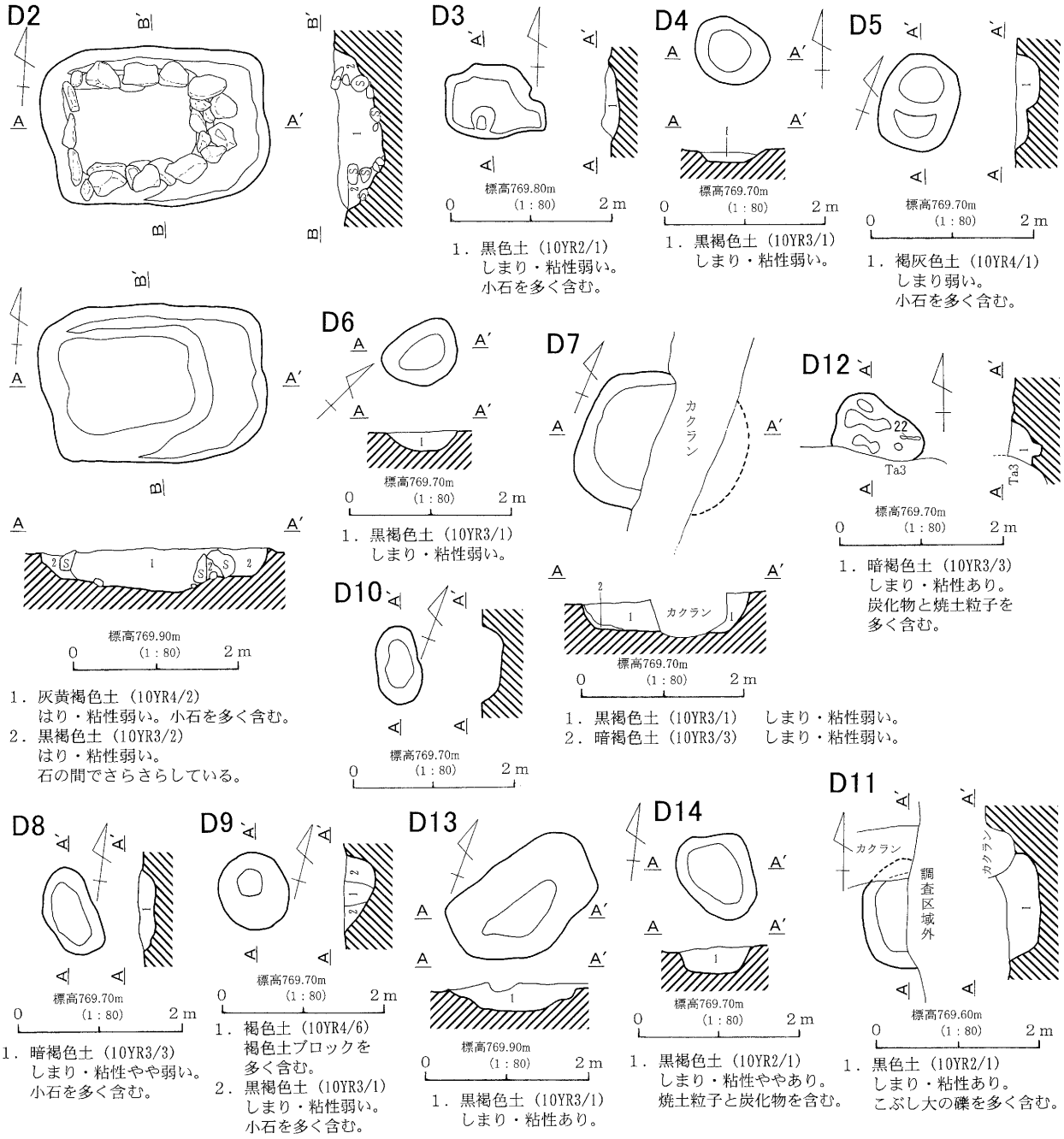
本址は調査区北側端で検出された。溝は東西方向に延びるものと考えられ、北側の溝立ち上がりは確認できなかった。規模は検出部で幅４ｍ・深さ2.05ｍを測る。覆土最上層には人頭大の円礫が多量に投げ込まれており近代の遺物が、また第２層中には17～19世紀代の遺物が混入していた。



第８図　Ｍ１号溝状遺構出土遺物実測図（１）



第９図　Ｍ１号溝状遺構出土遺物実測図（２）

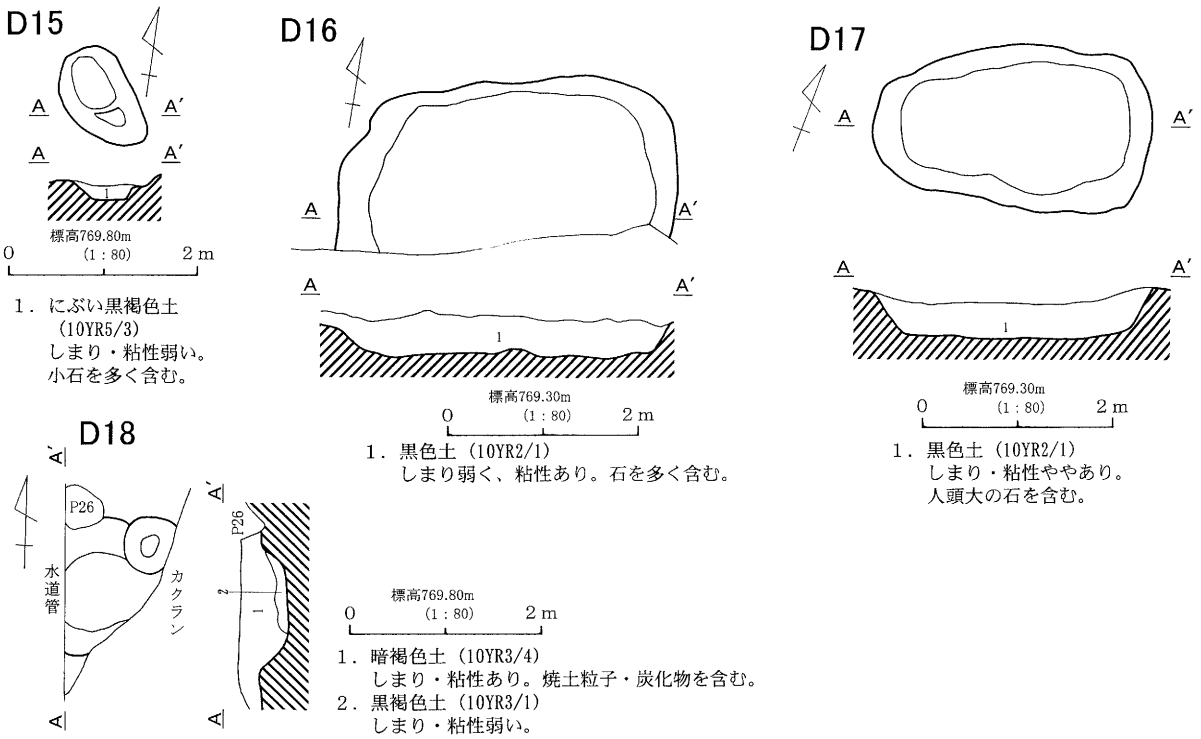


第10図　土坑実測図（1）

遺物は溝覆土上層を中心に数多く出土した。７と８は土鍋であるが、器高が低くいわゆる「焙烙」に分類される。９は土師質の火鉢で底部に墨書が書かれている。13は推定器高であるが土師質の植木鉢であり、底部に穿孔がある。12は鉄製品であるが一部を内側に折り曲げて鎌のような形状に変形した物で使用目的は不明である。23と24は碁石、25は硯と考えられる。32は円柱状の石製品で二次焼成を受けている。

（２）Ｍ２号溝状遺構

本址は調査区中央部に位置する。Ｍ１号溝と同じく東西方向に延びると考えられ、ほぼ２本の溝は平行している。規模は幅3.30m、深さ1.30mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。本址も覆土の上層部



第11図　土坑実測図（2）

分に人頭大の礫が詰まった層が確認されたが、近世遺物等の混入は見られず、6層や7層を中心に図示した中世遺物が出土した。Ｍ２号溝からの出土遺物にはＭ１号溝に比べて砥石や臼類がないのが特徴的であった。

３．土　坑

今回の発掘調査では18基の土坑が検出された。これらの土坑はその覆土の状態や出土遺物より、縄文期と中世にそれぞれ所産時期が分かれる。以下がその大別である。

縄文期　　Ｄ３．Ｄ５．Ｄ６．Ｄ８．Ｄ11．Ｄ12．Ｄ13．Ｄ15．Ｄ16．Ｄ17．

中　世　　Ｄ２．Ｄ４．Ｄ７．Ｄ９．Ｄ10．Ｄ14．Ｄ18．

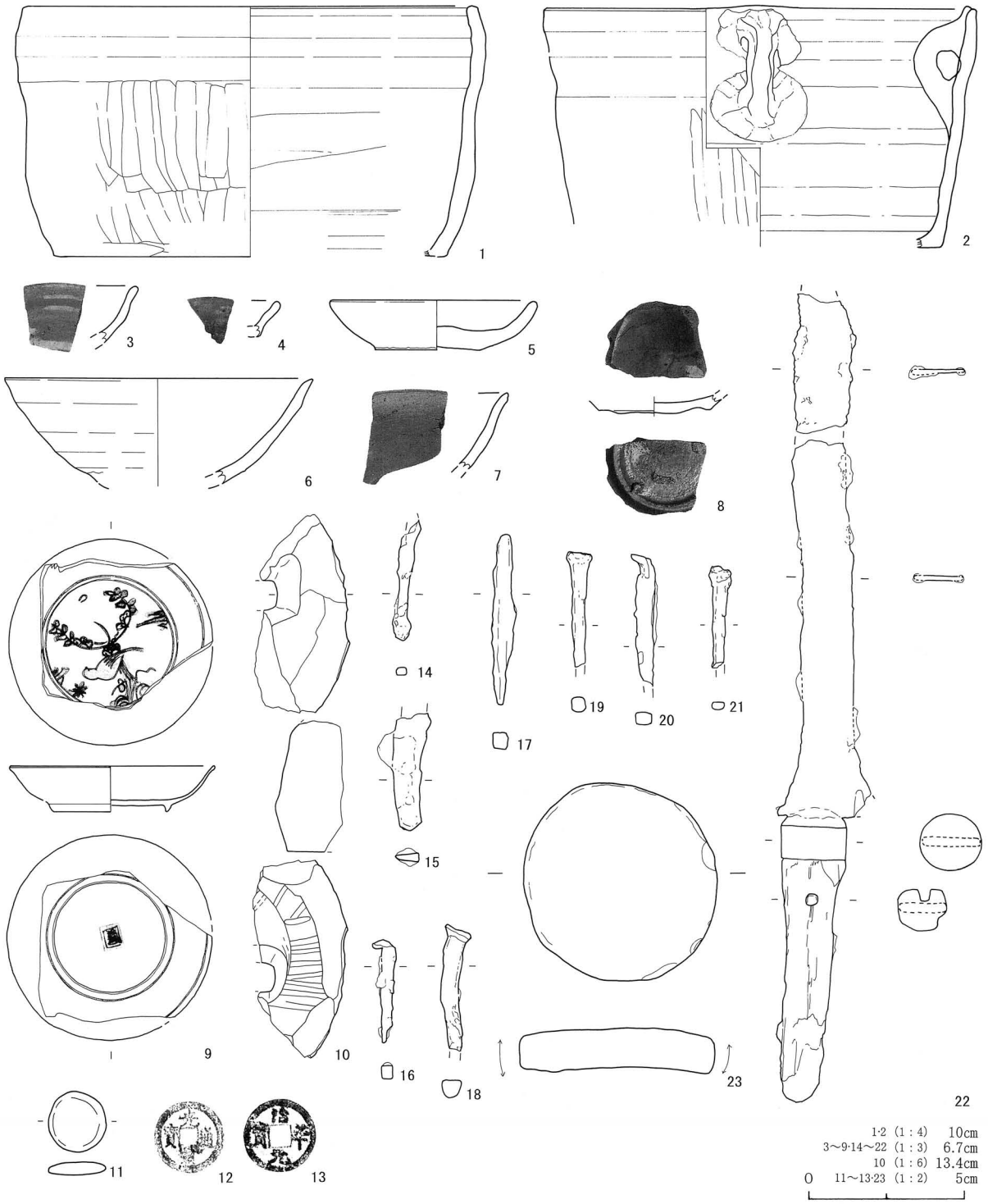
ここでは特徴的な遺構について記載し、そのほかについては「遺構計測一覧」を参照されたい。

（１）Ｄ２号土坑

本址は調査区中央の北よりで検出された。Ｍ２号溝状遺構と重複関係にあり本址の方が新しい。形態は東西方向に長軸をもつ方形で、中央に石組み遺構を持つ。この石組みは北壁と南壁が最大三段で高さ40cmに扁平な川原石を平らに積み上げている。これとは対照的に東西の壁は扁平な川原石を立てた状態で使用し、高さも40cm程である。土坑底面は硬質化したような様子は観察できなかった。石組みを外すと一回り大きな掘り込みが検出された。本址からの出土遺物は小片化した土鍋やカワラケ片２点があったのみである。

（２）Ｄ12号土坑

本址は調査区北側のＴａ３号竪穴状遺構の北壁に接するように検出された。新旧関係は本址の方が古い。本址からは図示した鉄製品が出土した。柄を下向きにして出土し、先端部を一部欠損する。銅製品による責金具が装着され、柄の部分には木質がサビ化して残存している。一見すると小刀に見えるが、刃部が鋸刃状になっている事と柄先が広がる事から鋸の可能性も指摘できる。

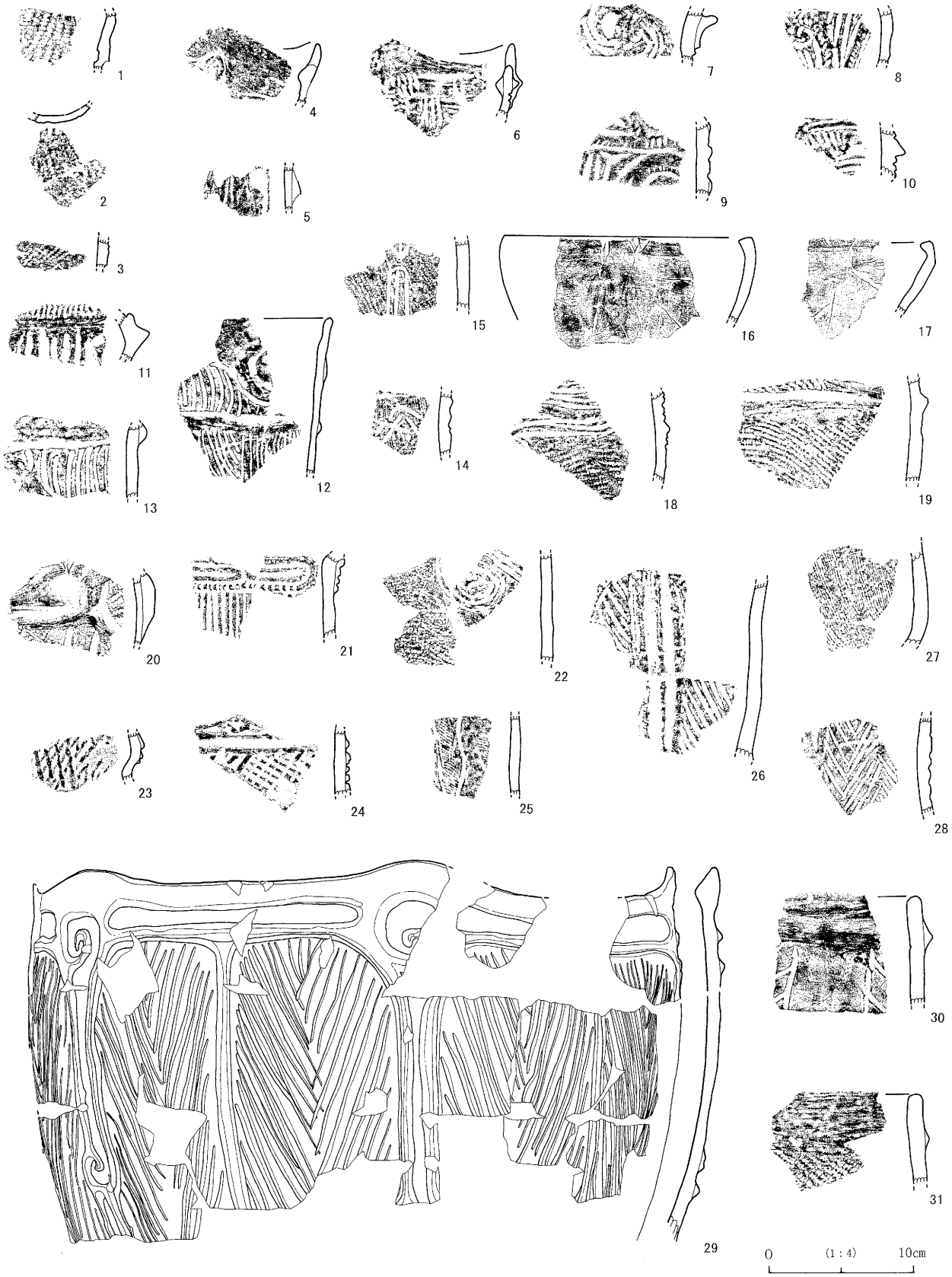


第12図　Ｍ２号溝状遺構．土坑．ピット出土遺物実測図

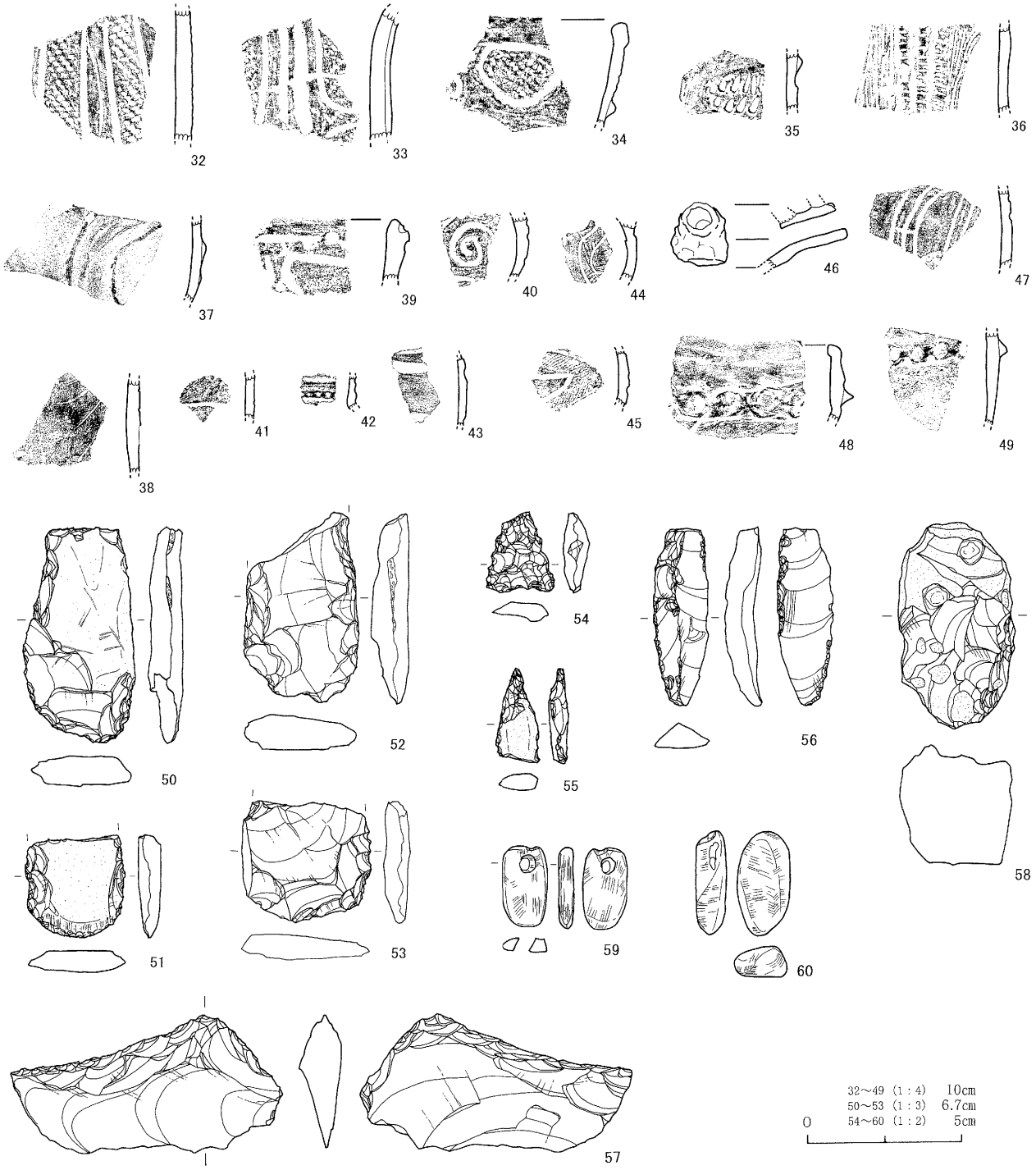
４．ピット

今回の調査では26個のピットが検出された。調査地点では縄文と中世二つの時期の遺構が検出されていることから、これらもそれぞれの帰属時期があると考えられるが出土遺物のあるものも少なく詳細は不明である。なお、掘建柱建物になりそうなピットは確認できなかった。

5．縄文期の遺物

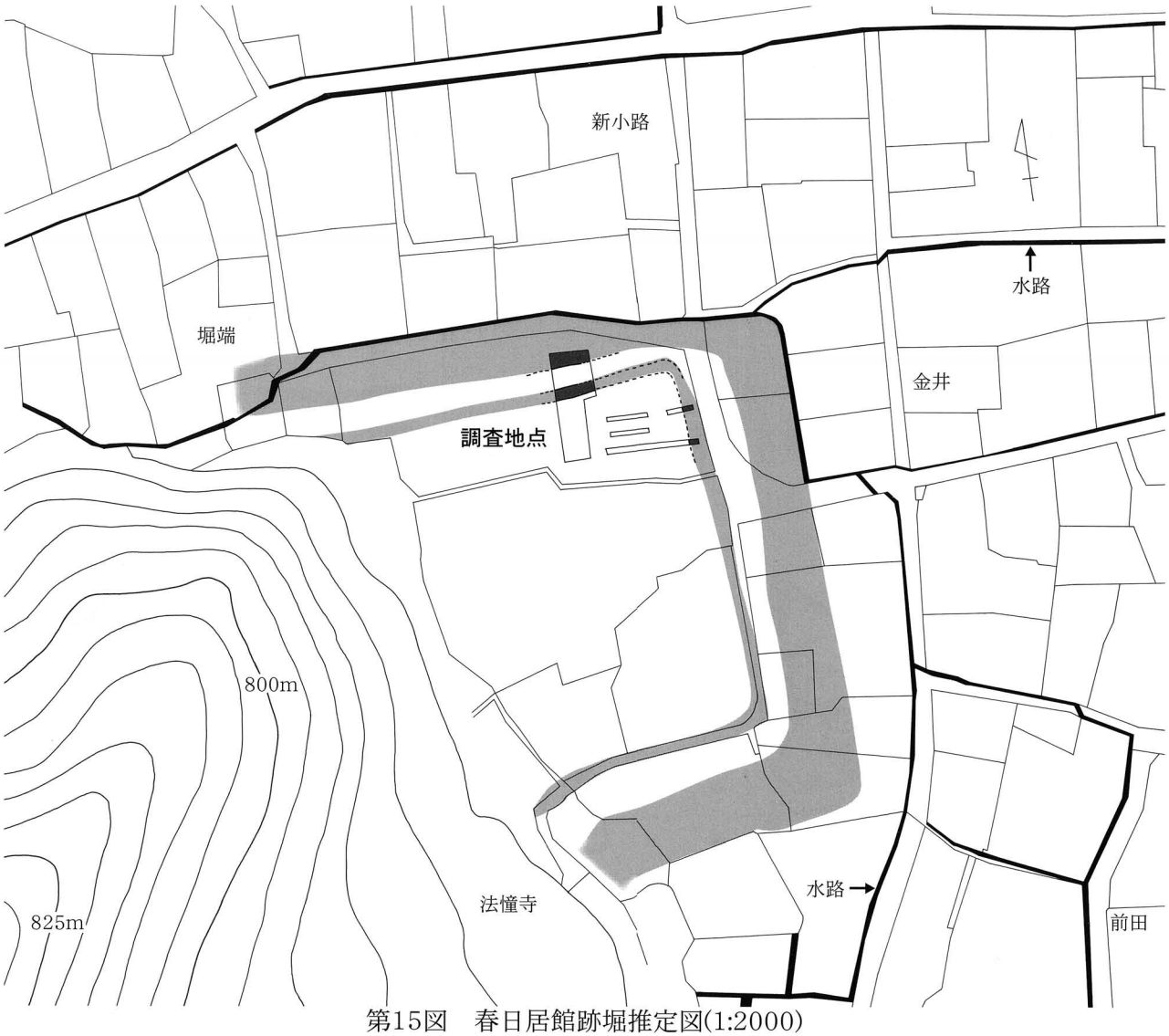


第13図　縄文期出土遺物実測図（1）



第14図　縄文期出土遺物実測図（2）

ここでは今回の調査によって出土した縄文期の遺物を一括して扱う。出土地点については遺物観察表を参照されたい。土器は前期から後期まで各時期を網羅するように出土しており、特に中期後半から後期までのものがやや出土量が多かった。縄文期の検出遺構は土坑のみであったが、鹿曲川の対岸に位置する後沖遺跡などは縄文集落が展開する為、本遺跡周辺でも集落址発見の可能性は十分にあると考えられる。なお、注目される遺物とし、Ｍ１号溝状遺構からの出土であるが翡翠の垂飾りがある（第14図-59）。片面からの穿孔でほぼ完形である。また、未製品（第14図-60）と考えられる石製品も出土している。



第15図　春日居館跡堀推定図(1:2000)

6．まとめ

今回の発掘調査は300㎡の小規模な調査であったが大きな成果が得られた。まず、第１に館の堀址と考えられる溝状遺構２本を確認できたことである。明治初年に書かれた『長野県町村誌』春日村「金城山康国寺」の項には「…この地は祖父下野守信守、父依田右衛門信蕃、二世の居址たるを以て寺とす。境内大杉・巨桜あり。塁濠二重ありて堀端小路の称あり。方二町、西は穴小屋の山城なり。…」という記載があり、幕末までは二重の堀が一部残存していたか、伝承が残っていた事となる。今回の発見された２本の溝はこの事実を裏付ける可能性が非常に高い。上に示した図は調査成果と現状の公図から堀址位置を推定したものだが、これによると山城を背に「コ」の字状に方150m程の中世館跡が浮かび上がる。

次に「五彩碗」である。景徳鎮系五彩の出土は佐久地域はもとより長野県内でも希少例である。日本国内でも少数であるが戦国期の町屋や館などから出土例があり、主に16世紀第３四半期頃から流通したと考えられている。館の主と考えられる依田氏の活躍時期と重なることから、依田氏使用も考えられるが、五彩碗と共伴する４号竪穴状遺構の出土遺物が17世紀初頭を示すものも含まれることから「康国寺」建立後の持ち込みも考えられる。どちらにしても今回の調査では館の全容把握は難しく、結論は今後の周辺部調査の進展に委ね、雑泊であるがまとめとしたい。

第1表　Ta1号竪穴状遺構			法　量			成　形・調　整・文　様		備　考	出土位置
No.	種別	器種	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外　面	内　面		
1	陶器	鉄釉皿			(4.1)	ロクロ	ロクロ	瀬戸・美濃　16世紀初頭？	Ⅳ区
2	陶器	こね鉢			(10.0)	ナデ	ヘラケズリ	尾張　13世紀前半	Ⅱ区
3	陶器	カワラケ皿	9.2	6.5	2.2	ロクロ　回転糸切り離し	ロクロ		検出
4	陶器	カワラケ皿	8.9	6.0	1.5	ロクロ　回転糸切り離し	ロクロ	16世紀後半	Ⅱ区
5	陶器	瓦質すり鉢			(5.5)	ナデ	沈線による擂り面	13～14世紀	検出
6	陶器	香炉			〈2.9〉	ナデ	ナデ	16世紀	検出

第2表　Ta3号竪穴状遺構			法　量			成　形・調　整・文　様		備　考	出土位置
No.	種別	器種	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外　面	内　面		
1	陶器	カワラケ皿	7.4	5.1	2.1	ロクロ	ロクロ　底部回転糸切り離し	15世紀末～16世紀	Ⅳ区
2	陶器	カワラケ皿	7.0	5.0	1.9	ロクロ	ロクロ　底部回転糸切り離し		Ⅳ区
3	陶器	土鍋			(7.0)	底部:手持ちヘラケズリ	ナデ		Ⅰ区

No.	器　種	素　材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重　量	出土位置	No.	器　種	素　材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重　量	出土位置
4	金具	金銅製	1/1	6.6			8.92		13	釘？	鉄製品		(14.0)			14.53	Ⅰ区
5	火打ちがね	鉄製品	1/1	4.3	6.3		24.17		14	茶臼・上	輝石安山岩		(8.9)	(10.7)	(11.5)	814.30	Ⅲ区
6	釘？	鉄製品		(3.1)			5.38		15	茶臼・下	輝石安山岩		(11.2)	(4.9)	〈4.1〉	137.06	Ⅰ区
7	釘？	鉄製品		(3.4)			3.38		16	茶臼・下	輝石安山岩		(10.7)	(6.8)	〈4.7〉	243.00	Ⅳ区
8	釘？	鉄製品		(3.5)			2.06	Ⅲ区	17	臼	輝石安山岩		(10.8)	(5,0)	〈6.7〉	200.21	Ⅰ区
9	釘？	鉄製品	1/1	5.2			4.85	Ⅳ区	18	臼	輝石安山岩		(7.1)	(5.9)	〈5.0〉	113.88	Ⅳ区
10	釘？	鉄製品		(4.7)			2.58		19	永楽通寶	銅製品	1/1	(明、1408年)				Ⅳ区
11	釘？	鉄製品		(2.5)			1.69		20	開元通寶？	銅製品	1/1	(唐、621年)				
12	釘？	鉄製品		(5.5)			5.56	Ⅰ区	21	皇□通□	銅製品	1/2	(北宋、1038年)				

第3表　Ta4号竪穴状遺構			法　量			成　形・調　整・文　様		備　考	出土位置
No.	種別	器種	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外　面	内　面		
1	磁器	五彩碗	12.0		〈4.8〉	官人	菊唐草文	龍泉窯系　15世紀末～16世紀後半	Ⅰ区
2	磁器	青磁碗		4.8	〈3.2〉	細線連弁文		スス付着　17世紀初頭？	Ⅱ区
3	陶器	カワラケ皿	10.8	7.7	3.1	ロクロ　底部回転糸切り離し	ロクロ		Ⅰ区
4	陶器	カワラケ皿	9.8	5.5	2.3	ロクロ　底部回転糸切り離し	ロクロ		Ⅱ区
5	陶器	カワラケ皿	8.7	6.1	2.5	ロクロ　底部回転糸切り離し	ロクロ		
6	陶器	灯明皿	8.4	4.8	2.1	ロクロ　底部回転糸切り離し	ロクロ		Ⅰ区
7	陶器	カワラケ皿		6.3	〈1.5〉	ロクロ　底部回転糸切り離し	ロクロ		
8	陶器	すり鉢	25.0	9.1	12.2	ナデ	ナデ	土鍋と同じ砂底	Ⅰ・Ⅱ区
9	陶器	土鍋	30.2	26.4	13.7	口縁ロクロナデ→胴部ヨコナデ　底部ナデ	口縁ロクロナデ→胴ヨコナデ　耳貼付		Ⅰ区

No.	器　種	素　材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重　量	出土位置	No.	器　種	素　材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重　量	出土位置
10	釘？	鉄製品		(7.2)			9.01	検出	11	皇□通寶？	銅製品	3/4	(北宋、1038年)				

第4表　M1号溝状遺構

No.	種別	器種	法量 口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	成形・調整・文様 外面	内面	備考	出土位置
1	磁器	白磁玉縁碗			(3.7)			Ⅳ類　11世紀後半～12世紀前半	Ⅰ区上層
2	磁器	青磁輪花皿			〈1.7〉			龍泉窯系　15紀末～16世紀前	Ⅱ区下層
3	陶器	天目茶碗		4.2	〈1.0〉			瀬戸　後期様式Ⅲ・Ⅳ　15世紀中～後半	Ⅰ区下層
4	陶器	カワラケ皿		6.9	〈1.3〉				Ⅱ・Ⅲ区
5	陶器	土鍋?			(3.5)		スタンプ文		Ⅱ区上層
6	陶器	香炉	11.4	10.8	5.2	ロクロナデ→脚貼付→ミガキ	ロクロナデ→口唇部ミガキ	底部にタタキ?あり　内面に赤い顔料付着	Ⅰ区上層・検出
7	陶器	土鍋	32.8	24.0	6.1	口～胴部ロクロナデ→底部外周ヘラケズリ　底部ナデ	ロクロナデ		Ⅰ区下層・Ⅱ区上層
8	陶器	土鍋	32.6	26.2	7.5	口縁ロクロナデ・胴部ナデ・底部ナデ	ロクロナデ	土鍋と同じ砂底	Ⅰ・Ⅱ区上層
9	陶器	火鉢		24.0	〈14.6〉	胴部ヘラナデ・底部板目・墨書あり	胴部ヘラナデ（工具使用）		Ⅰ・Ⅱ区上層
10	陶器	土製円盤	4.5		0.9				Ⅰ区下層
13	陶器	植木鉢	28.6	20.6	15.0	脚貼付→口縁～胴部ミガキ・底部ナデ	ロクロナデ	底部に焼成前穿孔	Ⅱ区上・下層

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	出土位置
11	釘？	鉄製品		(6.3)			4.49	Ⅰ区下層
12	鎌？	鉄製品	1/1	12.4	3.0		45.59	Ⅱ区下層
14	寛永通寶	銅製品	1/1	Ⅰ期＝古寛永（1636～1659年）				Ⅰ区上層
15	太平通寶	銅製品	1/1	（北宋、976年）				Ⅱ区下層
16	元豊通寶	銅製品	1/1	（北宋、1078年）				Ⅱ区下層
17	古銭	銅製品	1/1					Ⅱ区下層
18	砥石	凝灰岩	1/1	14.0	3.2	2.1	115.96	Ⅱ区上層
19	砥石	凝灰岩	1/1	9.2	3.1	2.7	89.19	検出
20	砥石	凝灰岩		(7.1)	(3.1)	(1.5)	50.93	Ⅱ区
21	砥石	凝灰岩		(7.6)	(3.2)	(2.6)	92.09	Ⅱ区上層
22	砥石	凝灰岩		(5.0)	(3.0)	(1.2)	26.22	Ⅱ区上層
23	碁石？	粘板岩		(2.0)	(2.2)	(0.25)	1.66	Ⅱ区上層
24	碁石？	粘板岩		(1.5)	(1.75)	(0.1)	0.22	Ⅱ区上層

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	出土位置
25	硯	粘板岩		(6.9)	(6.5)	(1.4)	80.53	Ⅰ区下層
26	臼	輝石安山岩	1/1	17.0	13.2	12.5	2737.12	Ⅱ区 孔径7.2×7
27	臼	石英安山岩		8.9	11.2	7.1	456.42	Ⅰ区 孔径7×6.3
28	臼	黒色多孔質安山岩	1/4	(15.5)	(12.9)	(14.7)	1367.58	Ⅱ区
29	窪み石	角閃石安山岩	1/1	16.4	10.2	8.3	1682.24	Ⅱ区 孔径4×3.7
30	五輪塔（地輪）	黒色多孔質安山岩		(13.0)	(21.8)	(12.9)	2384.66	Ⅰ区上層
31	五輪塔（地輪）	黒色多孔質安山岩		(13.0)	(17.5)	(11.3)	1946.83	Ⅰ区上層
32	不明	溶結凝灰岩		6.1	9.8	6.1	874.71	Ⅱ区下層
33	臼	輝石安山岩	1/4	(14.1)	(16.2)	9.8	2145.23	Ⅱ区 孔5.8×4.3
34	臼・下	輝石安山岩	1/4	(25.7)	(16.6)	(14.9)	5150.00	下層
35	臼・下	安山岩	1/2	(33.4)	(16.0)	(16.2)	11560.00	Ⅱ区下層
36	臼・上	輝石安山岩		(31.6)	(32.0)	(13.5)	16230.00	Ⅰ区上層

第5表　M2号溝・土坑

No.	種別	器種	法量 口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	成形・調整・文様 外面	内面	備考	出土位置
1	陶器	土鍋	29.5	25.5	16.2	口縁ロクロナデ→胴部ヘラナデ	胴部ヨコナデ・口縁ロクロナデ		M2Ⅰ区
2	陶器	土鍋	28.0		15.4	口縁ロクロナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヨコナデ		M2Ⅱ区
3	陶器	皿			(3.2)			瀬戸・美濃　大窯Ⅰ期　15世紀末～16世紀前半	M2Ⅱ区
4	陶器	皿			(2.1)			瀬戸・美濃　後期様式　15世紀末	M2Ⅱ区
5	陶器	カワラケ皿	10.0	5.0	2.4	ロクロ	ロクロ		M2Ⅰ区
6	陶器	平碗	15.0		〈5.3〉			古瀬戸　後期様式Ⅲ・Ⅳ　15世紀中～後半	P23
7	陶器	山茶碗			(4.1)			美濃・尾張より北?　Ⅴ～Ⅵ形式　12C末～13C前半	イ－9
8	陶器	皿		5.4	〈1.0〉			瀬戸・美濃　大窯　16世紀代	試掘3トレンチ
9	磁器	染付碗	9.9	5.6	2.2	底部に崩れた	梅に鳥	景徳鎮系　16世紀後半	試掘7トレンチ

No.	器　種	素　材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重　量	出土位置	No.	器　種	素　材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重　量	出土位置
10	臼	輝石安山岩		(19.4)	(9.3)	13.6	2760.3	検出	17	釘？	鉄製品	1/1	8.2			14.01	M２Ⅱ区
11	碁石	碧玉		1.9	1.85	0.5	2.53	イ－９	18	釘？	鉄製品		(6.2)			12.76	Ｄ２
12	光順通寶	銅製品	1/1	(後黎、1460年)				検出	19	釘？	鉄製品		(5.5)			8.03	Ｐ14
13	治平元寶	銅製品	1/1	(北宋、1064年)				ィ－９	20	釘？	鉄製品		(6.1)			10.30	ウ－９
14	釘？			(5.9)			4.07	M２Ⅱ区	21	釘？	鉄製品		(4.3)			4.88	イ－９
15	釘？			(5.7)			11.02	M２	22	鋸？	鉄製品		(39.1)	2.7		148.66	Ｄ12
16	釘？		1/1	5.0			4.02	Ｄ２	23	土製円盤			6.5		1.3		検出

第６表　縄文土器・石器

No.	器　種	形　式	残存長	文　　様	出土位置	No.	器　種	形　式	残存長	文　　様	出土位置
1	深鉢	前期	(4.0)	繊維　単節縄文	ウ－９	26	深鉢	加曾利EⅢ～Ⅳ	(12.5)	隆帯　沈線	イ－９
2	深鉢	前期	(4.5)	繊維　単節縄文	ウ－８	27	深鉢	加曾利EⅢ～Ⅳ	(7.3)	撚糸？	Ｔａ１Ⅳ区
3	深鉢	前期	(2.0)	繊維　単節縄文	Ｄ２	28	深鉢	加曾利EⅢ～Ⅳ	(6.8)	隆帯　沈線	Ｄ１６
4	深鉢	中期後半北信・新潟	(4.2)	隆帯剥落　沈線	ウ－９	29	深鉢	加曾利EⅢ～Ⅳ	(26.3)	隆帯　沈線　口縁部波状	M1Ⅰ・Ⅱ区
5	深鉢	中期後半北信・新潟	(3.5)	隆帯剥落　沈線	Ｔａ１Ⅳ区	30	深鉢	加曾利EⅢ～Ⅳ	(7.5)	隆帯　沈線	試掘１トレ
6	深鉢	焼町	(5.1)	隆帯　沈線　刺突	検出	31	深鉢	加曾利EⅢ～Ⅳ	(6.5)	隆帯　縄文LR	試掘３トレ
7	深鉢	焼町	(3.2)	隆帯　沈線	検出	32	深鉢	加曾利EⅢ～Ⅳ	(8.5)	沈線　縄文LR	M1Ⅰ区上層
8	深鉢	焼町	(4.0)	刻み付き隆帯　沈線	Ｄ１６	33	深鉢	加曾利EⅢ～Ⅳ	(7.5)	隆帯　沈線　縄文	Ｔａ１Ⅱ区
9	深鉢	勝坂	(5.1)	刻み付き隆帯　沈線	ィ－９	34	深鉢	中期後半加曾利E	(6.8)	隆帯　縄文	M1Ⅱ区下層
10	深鉢	曽利Ⅰ	(3.4)	半截竹管による横線	Ｔａ１Ⅱ区	35	深鉢	中期後半佐久系?曾利?	(3.8)	隆帯　刺突	検出
11	深鉢	曽利Ⅰ	(3.5)	沈線	Ｔａ１Ⅳ区	36	深鉢	中期後半曽利	(5.7)	刻み付き隆帯　沈線	Ｔａ１Ⅱ区
12	深鉢	佐久系	(11.4)	隆帯　沈線	Ｍ１Ⅱ区	37	深鉢	堀ノ内	(5.5)	隆帯	Ｔａ３Ⅰ区
13	深鉢	佐久系	(5.3)	隆帯　沈線	M1Ⅰ区上層	38	深鉢	堀ノ内	(6.1)	沈線	Ｔａ３Ⅱ区
14	深鉢	加曾利ＥⅢ	(4.5)	太沈線　条痕　縄文	Ｔａ１Ⅳ区	39	深鉢	堀ノ内Ⅰ	(4,0)	沈線　刺突	Ｍ２Ⅱ区
15	深鉢	加曾利ＥⅢ	(5.0)	縄文　沈線	ウ－１０	40	深鉢	堀ノ内Ⅰ	(4.5)	沈線	検出
16	深鉢	曽利Ⅱ	(5.9)	口径17.2　　口縁部無文	Ｔａ１ⅠⅡ区	41	深鉢	堀ノ内	(2.8)	沈線　縄文	M1Ⅱ区上層
17	深鉢	曽利Ⅱ	(6.0)	口縁部無文	Ｔａ１Ⅱ区	42	深鉢	堀ノ内Ⅱ	(2.0)	圧痕付き隆帯	Ｔａ１　検出
18	深鉢	大木	(6.5)	半截竹管による横線　縄文	ィ－９	43	深鉢	堀ノ内Ⅰ	(4.5)	太い沈潜	検出
19	深鉢	加曾利Ｅ	(7.2)	隆帯　縄文LR	M1Ⅰ区下層	44	深鉢	堀ノ内	(4.0)	沈線　縄文	Ｔａ１Ⅲ区
20	深鉢	加曾利Ｅ	(5.2)	隆帯　沈線　縄文	M1Ⅱ区上層	45	深鉢	堀ノ内	(3.7)	沈線　縄文	Ｔａ３Ⅳ区
21	深鉢	曽利Ⅰ	(5.5)	半截竹管による横線	Ｔａ１Ⅱ区	46	深鉢	堀ノ内	(5.5)	注口部	試掘６トレ
22	深鉢	大木	(7.5)	半截竹管による横線　縄文	Ｔａ１Ⅰ区	47	深鉢	堀ノ内Ⅰ	(5.0)	沈線	検出
23	深鉢	加曾利ＥⅠ	(3.5)	浮線文	ィ－９	48	深鉢	堀ノ内	(5.2)	圧痕付き隆帯	M1Ⅰ区下層
24	深鉢	加曾利ＥⅠ	(4.5)	半截竹管による横線？浮線文	M1Ⅰ区下層	49	深鉢	堀ノ内	(5.7)	圧痕付き隆帯	試掘３トレ
25	深鉢	加曾利EⅢ～Ⅳ	(5.5)	縄文　沈線	Ｔａ３Ⅳ区						

No.	器　種	素　材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重　量	出土位置	No.	器　種	素　材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重　量	出土位置
50	打製石斧	輝石安山岩		10.4	5.5	1.6	121.45	M1Ⅱ区上層	56	石刃	黒耀石		5.8	1.8	0.8	8.39	M1Ⅱ区5層
51	打製石斧	石英閃緑岩		(4.9)	(4.9)	(1.1)	39.79	M1Ⅱ区下層	57	スクレイパー	黒色緻密安山岩		4.5	8.8	1.4	43.60	Ｔａ３
52	打製石斧	輝石安山岩		(9.1)	(5.5)	(1.8)	113.07	M1Ⅱ区下層	58	石核	黒耀石		6.7	3.8	3.8	101.23	M1Ⅱ区上層
53	打製石斧	黒色緻密安山岩		(5.8)	(6.2)	(1.2)	56.77	M1Ⅱ区上層	59	垂飾	ひすい輝石		2.6	1.5	0.5	3.70	M1Ⅰ区下層
54	石鏃	黒耀石		2.6	2.2	0.8	3.61	ィ－９	60	垂飾未製品	蛇紋岩		3.3	1.7	1.0	8.57	Ｔａ３Ⅱ区
55	石鏃	鉄石英		3.1	1.45	0.6	2.60	ィ－２									

第７表　土坑・ピット計測表

番号	出土位置	長軸×短軸×深さ	形　態	出土遺物等	番号	出土位置	長軸×短軸×深さ	形　態	出土遺物等
D2	ウ－4.5	276×198×59	方形	石組・土鍋片・ｶﾜﾗｹ片	D11	イ－６	(136) ×〈55〉×41	隅丸方形	
D3	ウ－３	123×93×14	不整形		D12	イ－３	115×〈64〉×38	不整形	縄文片
D4	ウ－８	95×77×17	円形	土鍋片	D13	イ．ウ－４	190×120×32	隅丸方形	縄文片３
D5	ウ－７	120×95×29	楕円形	縄文片	D14	ウ－３	112×88×35	不整形	土鍋片
D6	ウ－６	97×74×27	円形		D15	エ－３	118×71×38	楕円形	縄文片
D7	ウ－８	(206) ×175×40	隅丸方形	土鍋片	D16	イ－９	355×〈170〉×42	楕円形	縄文片
D8	イ－６	112×64×18	楕円形		D17	イ．ウ－９	293×175×56	隅丸方形	
D9	イ－６	97×84×41	円形		D18	イ－３	147×－×50	不整形	ピットあり・土鍋片
D10	イ－６	97×53×28	楕円形						

番号	出土位置	長径×短径×深さ	形　態	出土遺物等	番号	出土位置	長径×短径×深さ	形　態	出土遺物等
P1	イ－７	56×46×25.5	楕円形？		P14	イ－６	58×〈32〉×27.5	楕円形	
P2	ウ－６	50×42×40	楕円形		P15	イ－６	30×26×17	楕円形？	
P3	ウ－７	56×52×45	円形？		P16	エ－４	32×30×12	円形	
P4	ウ－６	47×41×42	楕円形		P17	エ－４	32×22×15	長方形	
P5	ウ－６･７	82×60×21	楕円形		P18	ウ－３	32×32×40	方形	縄文片
P6	ウ－６	60×50×27	楕円形		P19	ウ－３･４	28×26×14	不整形	縄文片
P7	ウ－６	51×44×19	楕円形		P20	エ－３	36×19×22	長方形	土鍋片
P8	ウ－７	54×46×10	楕円形		P21	イ－９	96×63×44	不整形	
P9	イ－６	40×35×22	楕円形	縄文片	P22	ウ－７･エ－７	48×38×27	楕円形	
P10	ウ－７	45×35×10	楕円形		P23	ウ－７	46×35×26	楕円形	
P11	ウ－６	35×32×19	円形	縄文片	P24	ウ－７	43×40×25	円形	
P12	ウ－６	55×46×24	楕円形		P25	ウ－８	96×66×27	楕円形	
P13	ウ－６	65×58×28	三角形？		P26	イ－３	〈45〉×44×28	楕円形	

調査区全景（北より）

Ta１竪穴状遺構（西より）

Ta３竪穴状遺構（東より）

Ta３竪穴状遺構掘り方（東より）

Ta４竪穴状遺構（西より）

Ｄ３号土坑

Ｄ２号土坑石組み状況

Ｄ２号土坑掘り方状況

図版二

Ｄ４号土坑

Ｄ５号土坑

Ｄ６号土坑

Ｄ７号土坑

Ｄ８号土坑

Ｄ９号土坑

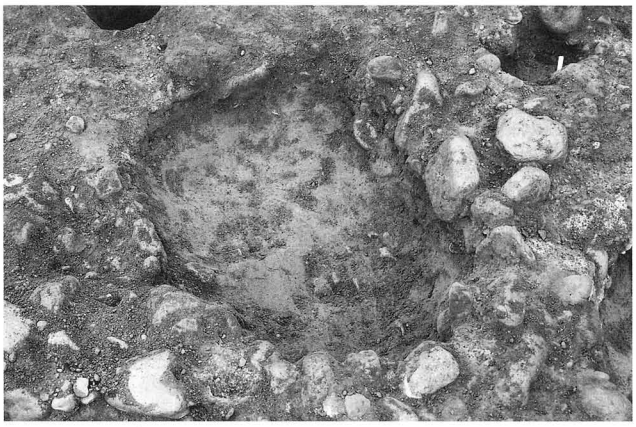
Ｄ１０号土坑

Ｄ１１号土坑

Ｄ１２号土坑

Ｄ１２号土坑遺物出土状況

Ｄ１３号土坑


Ｄ１４号土坑

Ｄ１５号土坑

Ｄ１６号土坑

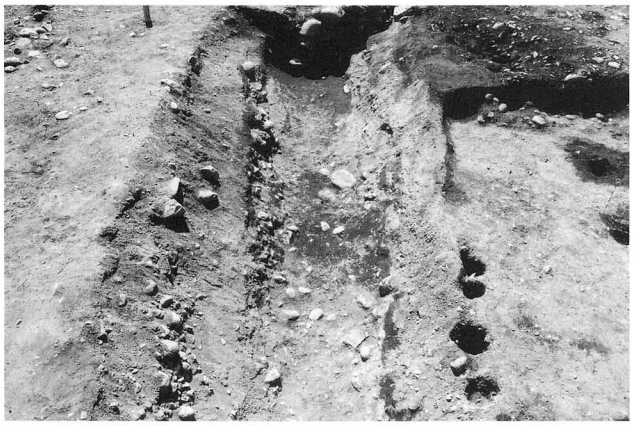
Ｄ１７号土坑

Ｄ１８号土坑

図版四

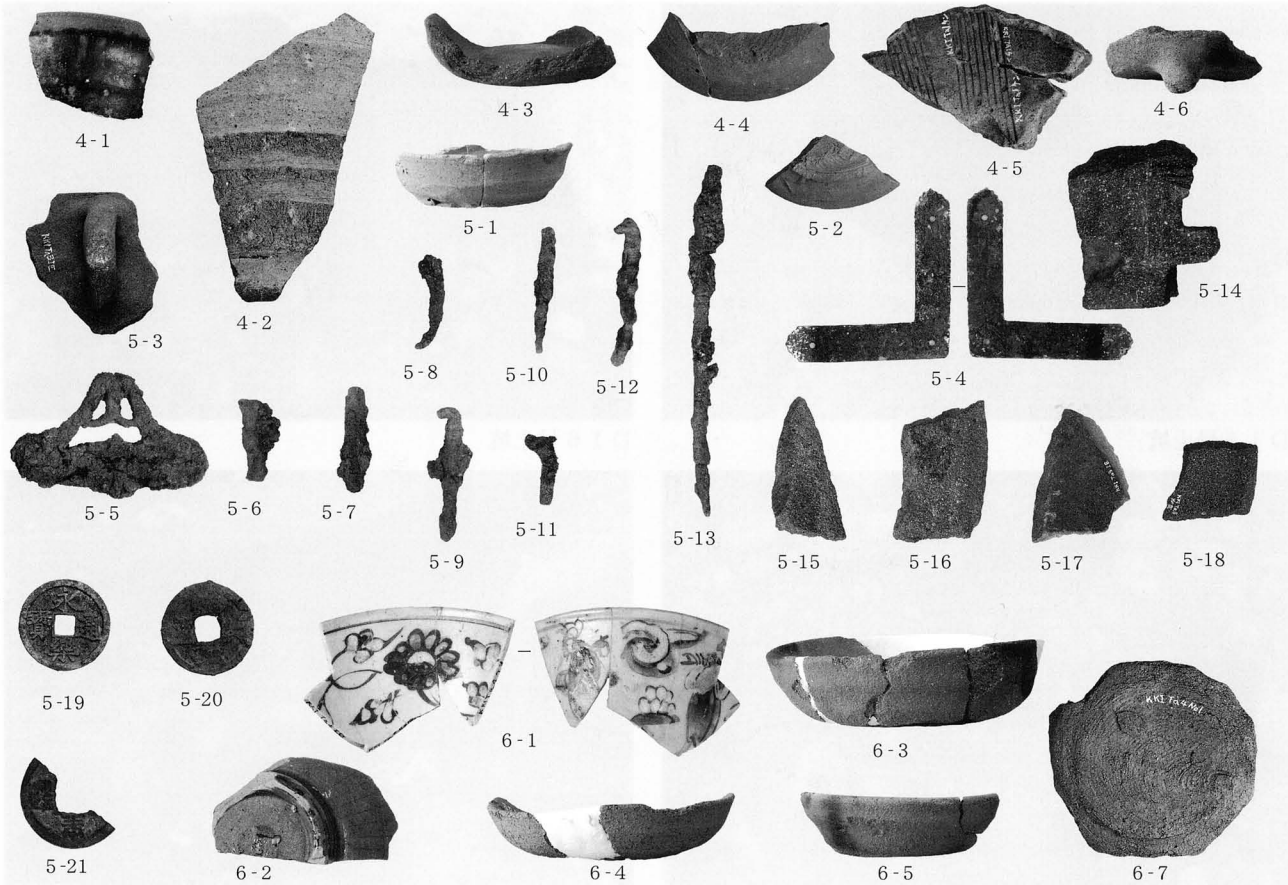
Ｍ１号溝状遺構（東より）

Ｍ１号溝状遺構土層断面

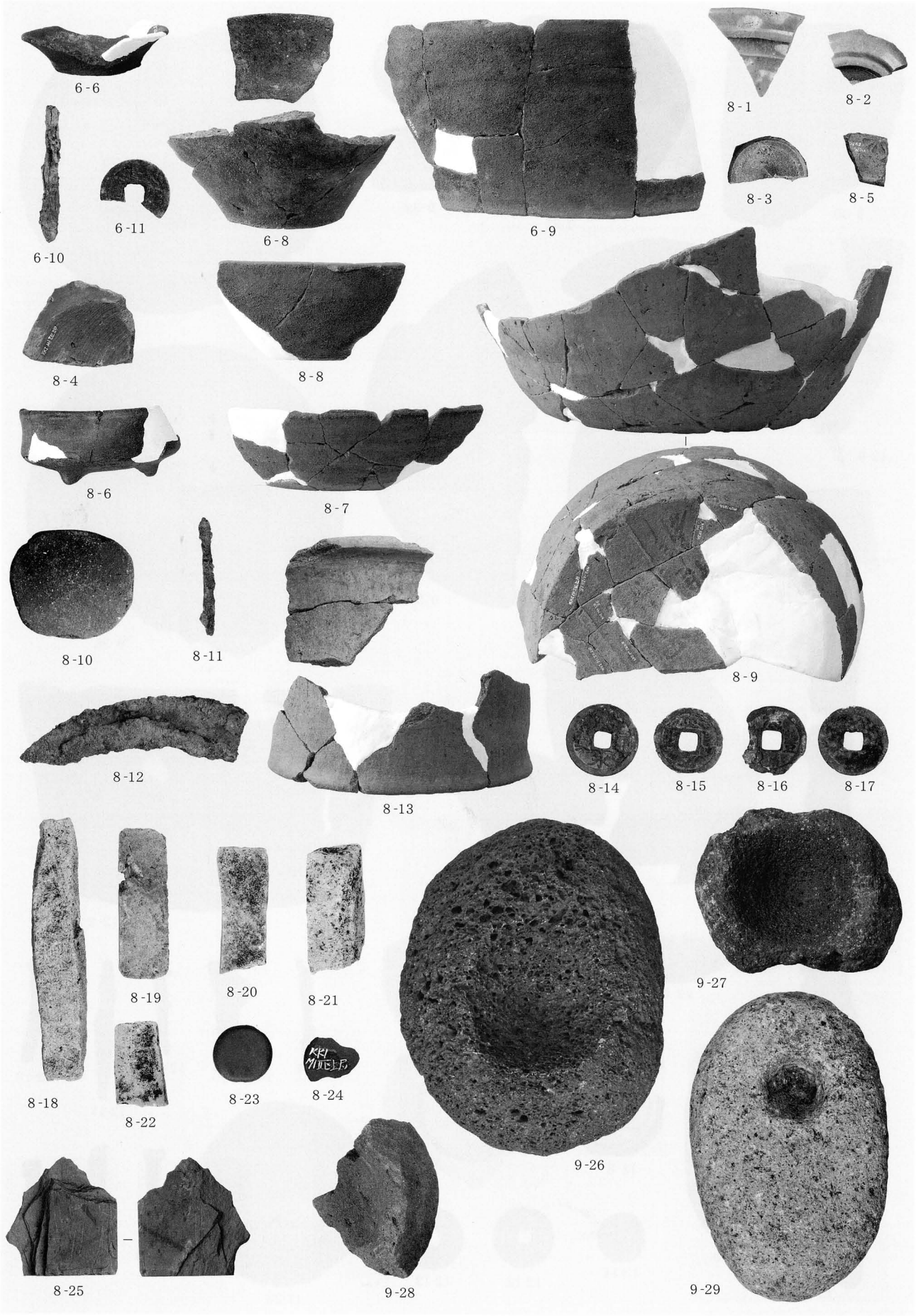


Ｍ２号溝状遺構（東より）

Ｍ２号溝状遺構土層断面

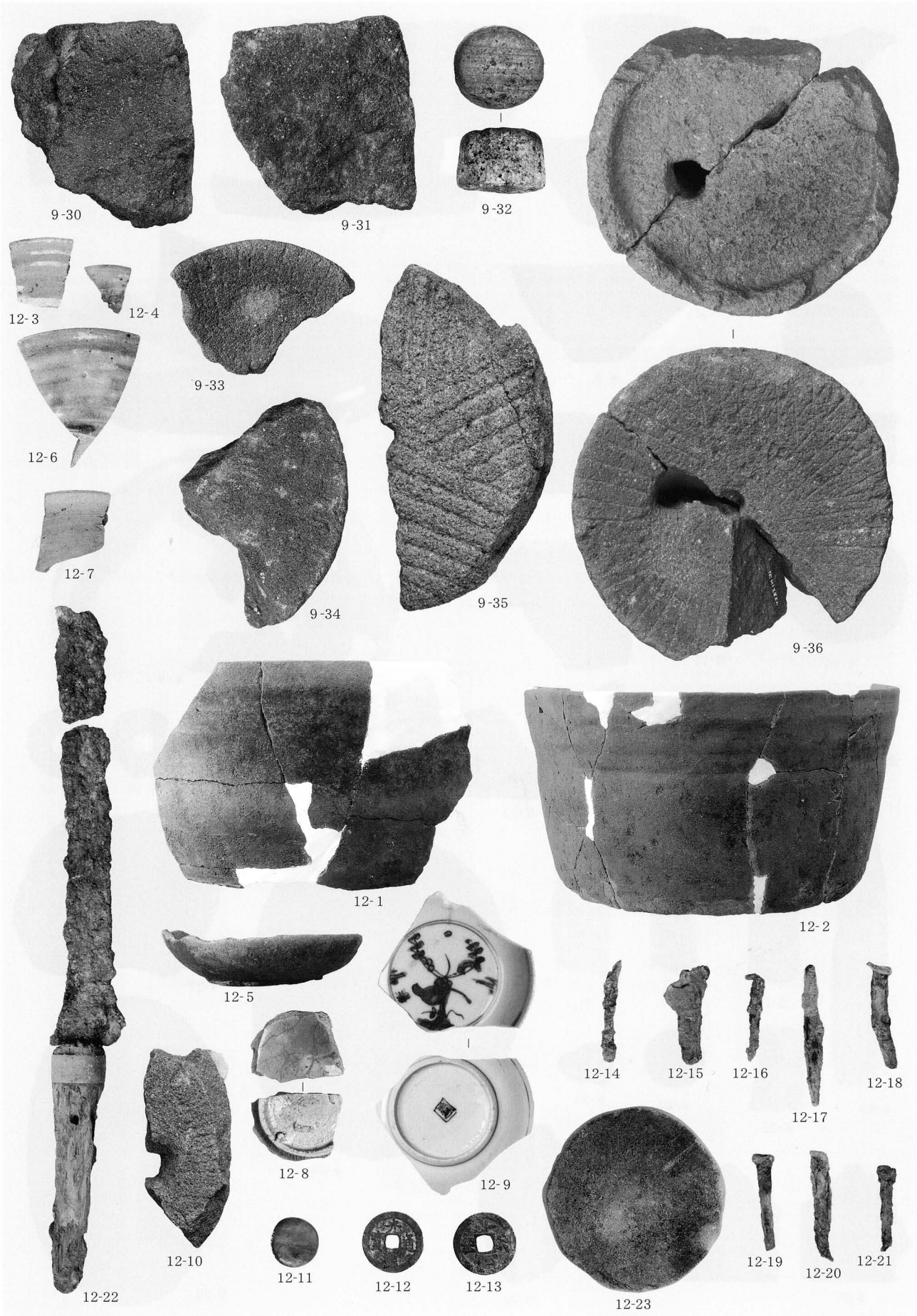


出土遺物①

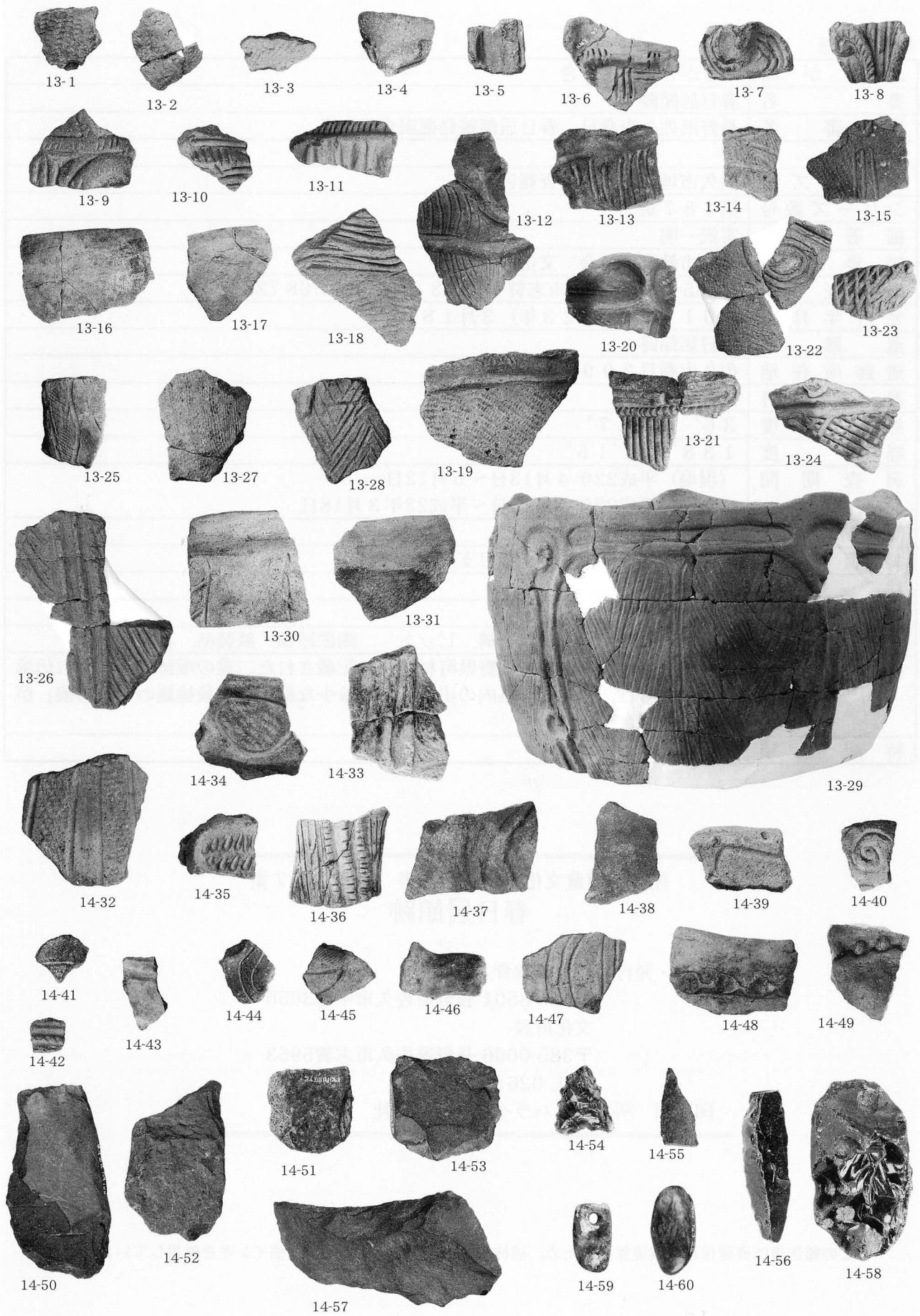

6-6
6-10
6-11
6-8
6-9
8-1
8-2
8-3
8-5
8-4
8-8
8-6
8-7
8-10
8-11
8-9
8-12
8-13
8-14
8-15
8-16
8-17
8-18
8-19
8-20
8-21
8-22
8-23
8-24
9-26
9-27
8-25
9-28
9-29

出土遺物②

図版六


9-30
9-31
9-32
12-3
12-4
9-33
12-6
12-7
9-34
9-35
9-36
12-1
12-2
12-5
12-8
12-9
12-10
12-11
12-12
12-13
12-14
12-15
12-16
12-17
12-18
12-19
12-20
12-21
12-22
12-23

出土遺物③


13-1
13-2
13-3
13-4
13-5
13-6
13-7
13-8
13-9
13-10
13-11
13-12
13-13
13-14
13-15
13-16
13-17
13-18
13-20
13-22
13-23
13-25
13-27
13-28
13-19
13-21
13-24
13-26
13-30
13-31
13-29
14-34
14-33
14-32
14-35
14-36
14-37
14-38
14-39
14-40
14-41
14-42
14-43
14-44
14-45
14-46
14-47
14-48
14-49
14-50
14-52
14-51
14-53
14-54
14-55
14-56
14-58
14-57
14-59
14-60

出土遺物④

報告書抄録

ふりがな	かすがきょかんせき
書名	春日居館跡
副書名	長野県佐久市春日　春日居館跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第１８７集
編著者名	冨沢一明
編集機関	佐久市教育委員会　文化財課
所在地	〒385-0006　佐久市志賀５９５３　　TEL0267-68-7321
発行年月日	２０１１年（平成２３年）３月１８日
遺跡名	春日居館跡
遺跡所在地	佐久市春日２９９４－１
遺跡番号	１１６１
緯度	３６°１３′１７″
経度	１３８°２１′１５″
調査期間	（現場）平成22年４月13日～５月12日 （整理）平成22年５月13日～平成23年３月18日
調査面積	３００㎡
調査原因	佐久浅間農業協同組合　春日支所建設事業
種別	城館跡
主な時代	縄文・中世
主な遺構・遺物	竪穴状遺構．土坑．溝状遺構．ピット　　陶磁器類．鉄製品．石器類
要約	明治初年に出された「長野県町村誌」に記載された二重の堀跡が発見され伝承を裏付けられた。また、県内の出土として希少な例となる景徳鎮の「五彩碗」が出土し注目された。
特記事項	

佐久市埋蔵文化財調査報告書　　第１８７集
春日居館跡

編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市中込3056
文化財課
〒385-0006 長野県佐久市志賀5953
TEL 0267-68-7321
印刷所　キクハラインク有限会社

この報告書は資源保護と環境保全のため、植林木を原料とする用紙と大豆油インキを使用しています。